

「社長の小山田です。ご足労いただきまして、ありがとうございます」  
鷺沼も右手を出して、二人は握手を交わした。

「さあ、どうぞ、お掛けになってください」

小山田は入り口の側の長手方向の椅子の方に視線を向けながら言うと、元の席に戻って腰を下ろした。それとほとんど同時に、湯飲みを4つ乗せた盆を両手で持って、先ほどの女性が部屋に入って来た。女性は盆を飾り棚の横に置いてから、湯飲みをひとつずつ鷺沼、小山田、祐子、そして鷺沼の横の椅子の前に運び、自分はその小山田の横の席に着いた。祐子は、この女性が接客係りを装っていることを見て取った。女性の眼鏡の奥にある目が祐子に鋭い視線を送ってきていた。小山田が冗談めいた口調で話し始めた。

「やあ、支社長、それにしても隅に置けませんな。こんな若くて別嬪な秘書を連れて歩いて、体が持たないんじゃないですか？」

祐子はムカッとしたが、表情を変えなかった。鷺沼が少し微笑みながらそれに応じた。

「社長、また、冗談がお上手で。社長こそ、見るからにご有能な秘書をお持ちで、うらやましい限りです」

小山田がまた、ニヤニヤしながら言った。

「でも、稀に見る美人ですね。どちらのご出身ですか？」

祐子は少し視線を落とし思考を止めた。鷺沼が言った。

「東京の出身ですが、まだ、秘書の経験はあまり無いんですよ・・・ところで、御社もなかなか頑張っておられるようですね」

鷺沼は話を逸らそうとしたが、小山田は執拗に祐子に向けた話をした。

「なかなかね、思うように儲かりませんね。うちにもこういう美人が居てくれたら、ワシも今の倍くらい働いちゃうんですがね。なあ、ふみよ、おまえじゃ整形しても、多寡が知れてるしな」

祐子は表情を変えずに少し視線を落としたままの姿勢でいた。ふみよと呼ばれた女性は、嫌な顔もせずに応えた。

「社長、そんなことばかりおっしゃっているから、業績が上がらないん

「じゃありませんか？」

「馬鹿を言え、ワシはおまえのような女を横目で見ながら毎日仕事をしているんだから、可愛そうなもんだ」

鷺沼がもう一度話を軌道に載せようとして言った。

「社長、どうですかね。最近の金属は上手く流れていますか？」

小山田は相変わらず乗って来ない。

「金属もね、そりゃ金なんかだったら、こちらのお嬢さんのベッドを作って差し上げるなんて朝飯前なんですがね。これが白金じゃね。冠も作れやしないんですよ。もともと、ワシの専属秘書にでもなってくれるんなら、世界中駆け廻ってでも、白金の冠でも、チタンのハンドバッグでも、何でも作っちゃいますけどね」

祐子は先ほどの苦いゲップが胃から突き上げてきて、気分が悪くなってきた。しかし、それを覺られないように、静かに唾を飲み込んだ。嫌な奴だと思った。いつまでも本題に入らない小山田に、多少いらつきを見せて、鷺沼が言った。

「社長、もうそろそろ、本題に入りましょうか？」

「支社長、そう慌てることはありませんよ。まだ時間はあるし、なにもここじゃなくても、場所を移して相談することだってできるでしょう」祐子は心の中で「とんでもない」と言い返したが、さり気なく鷺沼の方を伺う姿勢を取った。鷺沼が言った。

「とりあえず、どうでしょう、この前提示させていただいた金額で。あれだけ確保していただだけませんか？」

そう言いながら、鷺沼は下打ち合わせで決めた通り、祐子が鷺沼の前に差し出したA4のバインダーに閉じた資料を、向きを変えて小山田の前にすっと押すように差し出した。小山田はその資料を手にも取らずに言った。

「鷺沼さんは、性急だな。じゃ、ひとつ、こうしましょうか？ 今晚、ディナーを一緒させていただいて、そこで今後のお付き合いなんかに附いて相談したり、総合的な取引のスケールに附いて取り決めたりしません

か？」

鷺沼は言った。

「勿論かまいませんが、この崎野は5時以降の勤務は契約上できませんので、わたしだけでもよろしいでしょうか？」

祐子は鷺沼が自分の旧姓を使ってくれたのと、機転を利かせて、勤務時間の契約などという作り話をしてくれたことで、ほっとして胸を撫で下ろした。

「それは無いですよ。折角、これほどの別嬪さんにお会いできたんだから、同席していただかなければ……」

「じゃ、こうしましょう、明日の昼食をご一緒させていただき、その時に崎野も同席させます。当社も1部上場の企業ですから、従業員との契約を破るような真似はできませんので」

小山田はしぶしぶ承知した。本当は酒の席に祐子を同席させたいようだった。鷺沼はそれを察知して先手を打った。小山田は言った。

「それじゃしょうがないな、じゃ、うちもふみよの代わりに一番の美人ミエを出しますよ。もっとも崎野さんには敵いませんけどね。まあ、そういうことで、明日はお互い手の内を見せましょうかね」

「分かりました。社長の気前のいいところを期待しています。我々もできる限りの努力をするつもりですから」

ハイパートレード社を出たのは3時半過ぎだった。取引とは言っても、単なる顔合わせ程度の内容だった。社有車に乗ると鷺沼が吐いて捨てるように言った。

「全く、やってられないよな。あんな輩と取引しなくちゃならないんだから。祐子さん、済まなかったな。今日はこれで引いていいよ。ホテルまで送るから、明日の朝は直接僕の席に来てくれないか。総務部の部長に引き合わせるから。君の席は総務部の中に設けてある。明日は昼食だな。全く、あんな奴と一緒に飯なんて食いたくないな」

「はい、わたくしもビジネスでああいう人に会うのは初めてです。あの方の話は何処までが本気で、何処までが冗談なのか境目が分かりませんで

した」

「あの手の男は、人に対してああいう対応の仕方をするのがよくあるんだ。案外本音を潜ませて話していることがあるから、君も気を付けたほうがいいよ。僕が居るときは防衛できるけど、個人的なコンタクトに対しては打つ手が無いからな。くれぐれも気を付けてくれよ。もしものことがあったら、社長に対して申し開きができないからな」

祐子は驚沼に頭を下げると、そのままチェックインカウンターに向かった。

ホテルのエントランスに車を横付けすると、運転手はトランクから祐子が預けておいたスーツケースを取り出し、ベルボーイに渡した。部屋は16階の1630号室だった。ベルボーイがカード式の電子キーを翳すとロックが外れた。中に入ると、ベルボーイはスーツケースを置き台の上に載せてから、カードを祐子に渡した。祐子は礼を言い、ベルボーイが部屋を出ると直ぐに扉に鎖錠を掛けた。客室はかなり広い造りになっていた。入り口を入れて直ぐの左手に1メートル幅のクローゼットがあり、その横に洗面所と浴室に入る扉が付いている。キングサイズのベッドが右奥の突き当たりに配置されていた。ベッドの左横にはドレッサーのような鏡付きのテーブルが設置されており、右側には4段の引き出し式のチェストが置かれていた。ベッドの反対側には両袖の引き出しが付いた机が用意されていて、その上に備え付けのPCが設置されている。一見して部屋全体に高級な造りが窺えた。祐子は先ず、スーツケースを開けると下着を取り出し、着ていたものを総て脱ぎ捨てた。身体に嫌なタバコの煙の臭いが染み付いている。小山田の吸ったタバコの煙だと思っただけで、気分が悪くなってきた。祐子は脱ぎ捨てた衣類を総てランドリーサービス用のビニール袋に押し込んで、匂いが漏れないように封をした。祐子は一糸纏わぬ姿となってバスルームに向かった。シャワーの湯が自分の身を清めてくれているような気がする。水は有り難いと思った。V E A S 館で体験した水の働きが脳裏を掠めた。以前青森から帰って来た亜希子が、祐子に聞かせた水の話の思い出した。賢が早苗に水

のすごさを説明した後で、亜希子に言った、「水も自分の意識が作っている」という言葉だ。祐子は賢に会いたくなって来た。そう思うとじっとしてられなくなって、急いでシャワーを済ませ、衣類を身に着けてから、備え付けのPCから賢の携帯にメールを送った。

「あなた、昨日はごめんなさい。今日は支社長さんとハイパートレード社の社長に会いました。とても嫌な感じの人だったわ。わたしは支社長の秘書兼iプロジェクトの本社との連絡担当というミッションを与えられたわ。本当は秘書になどなりたくなかったのよ。でも仕方ないわね。iプロジェクトに関係しないことには、あなたに接近できないでしょう。止むを得ないわ。わたしは大丈夫。何とか頑張って仕事をこなしてゆくつもりよ。今、ホテルなの。時間が空いたら電話してね。あなた、愛しているわ」

メールを送り終わると、祐子はベッドの上に身を投げ出した。昨日からの緊張の為か、そのまま泥のように眠りに落ちた。

賢は気が気でなかった。祐子からは朝の電話以来、何の音沙汰も無い。iプロジェクトの予算ブレイクダウンの作業は難航を極めた。モデル地区を創る案の土地の確保は、買収という形態をとることは不可能だった。訳の分からない事業の為に、試験台になろうなどと言い出す地区があろうはずも無い。だからと言って商店街程度の狭い地域に限定しては、到底全国規模の影響力などは見込めない。一番の狙い目は過疎化してしまった地域だ。その地域が村程度の大きさであれば丁度いいのだと賢は考えていた。その過疎地域の候補を幾つか探し出す活動のための予算、探し出した後の地域の役所や住民との協議・協力の要請等の予算、地域を隔離するための土地の確保と工事の為の予算、地域が確定したら、役所を流用する為の改装予算。役所で働くメンバーの確保または現行の役人の留任、新しい生活システムのベースになるコンピュータシステムの開発予算、システムの導入予算などなど、次から次に項目を列挙し、それに想定される予算額を記入してゆく作業、それがこの日纏めなければなら

ないことだった。モデル地域に関する予算の策定のほか、楠木の提案しているVEASのようなテーマ館についての予算化、田辺の提唱したWEBを用いたプロパゲーションシステムの設計、インフラ構築のための予算化。それらについて、先ず費用発生の考えられる項目をランダムに記述していった。5時になると3人ともくたくたに疲れてしまった。この日は定時で引くことにした。3人が部下にも命じてピックアップした項目は1000項目を超えた。5時少し前に賢は祐子からメールが入っていることに気付いた。会社を出ると直ぐに祐子に電話を掛けた。携帯は電話の届かないところにあると応答している。何度電話しても同じだった。賢は九州支社長の鷺沼に電話して、祐子の滞在先を聞くことにした。九州支社のiプロジェクトの進め方に附いて、2、3質問してから、連絡係と緊急連絡について話をしておきたいと言って、香川の電話番号と、祐子の滞在先のホテル名と電話番号を尋ねた。鷺沼は事務的に回答した。賢は直ぐにホテルに電話を入れ、祐子の部屋に繋いでもらった。7回目の呼び出し音で、やっと祐子が出た。

「もしもし……あっ！あなた、あなたね。ああ、やっと話せた。辛かったのよ」

祐子の涙声を聞くと、賢の目にも涙が浮かんできた。

「祐子、随分心配したんだぞ。一体どうしたんだ」

「う、うん、昨日のことね？わたしにも分らないの。ホテルで支店長さんたちと昼食を摂って……そう、昼食は遅かったの。午前中の打ち合わせが長引いて。それから夕方まで今後の仕事の進め方なんかを打ち合わせて、それで6時半頃ホテルを出たの。ごめんなさい、わたし、どうかしていたの。携帯を家に置き忘れて……そう、それが可らしいのよ。家にも無かったの。何処かに落としてしまったのかしら。確か、ドレッサーの前であなたに電話したのよ。でも……で、だからあなたに連絡を取るのにキングホテルの電話ボックスで支店長さんたちに分らないように掛けたのよ。でもどうしてもあなたに繋がらなかった。ホテルを出て、「早くあなたとの待ち合わせ場所に行かなくちゃ」と思って、

急いで飛び出したの。あの時間帯は道が混んでるでしょう。だから、電車で行こうと思って早足で歩いていたら、急に気分が悪くなって来たの。頭痛はするし、吐き気までしてくる始末。近くに喫茶店があったから、5分ほど休めば直ると思って中に入ったの。確か、コーヒーは頼んだと思うわ。でもその後のことは記憶に無いの。ウェイターに揺り起こされて気が付いたの。もう時間が遅かったから、そのまま家に戻ったわ。でも、その時も思考回路が停まったような状態だった。考えがまとまらないのね。家でも亜希子さんがいろいろ話し掛けて来たんだけど、自分が自己防衛でもしているような対応をしていたことは、うっすらと記憶にあるわ。どうしたのかしら。なんだかインフルエンザに罹ったような感じだった。でも朝には直っていたの。不思議なのよ。わたしと一緒に居た鷺沼支社長も香川課長も何でもなかったのに・・・食事の中に何か入っていたのかも知れないと思ったけど、多分そんなことは無いと思い直したの。何か変なものを口にしてしまったのなら・・・そうね、コーヒーかな？でもコーヒーは会議室にセットされたポットからのセルフサービスだったし・・・本当に可笑しいのよ」

「今は何ともないのか？」

「今朝と、それから今日の午後の客先との打ち合わせ・・・これが酷い相手で、そのことも話したいの。その打ち合わせの時、胃から苦いゲップが出て来て、口の中が気持ち悪くなったわ」

「薬物だな。胃も痛くなるだろう」

「うん、時々」

「祐子、薬を盛られた可能性があるな・・・一体どういうことなんだ。コーヒーかな、危ないのは。昨日の打ち合わせの時、何度か席を立ったか？」

「うん、2回かな。トイレと、あなたに電話を入れようとした時、結局上手く電話できなかったけど」

「今日の客先の話をしてくれないか？」

祐子はハイパートレード社の社長小山田との会合の様子を事細かに説

明した。賢は祐子話を聞いていて、小山田という男に不快感、いやむしろ戦慄に似た感覚を覚えた。賢が言った。

「祐子、直ぐに会社を辞めろ。直ぐにだ。このままじゃ何が起きるか分らない。おまえの身が危険だ。鷺沼さんは一体何を考えているんだ」

「ううん、鷺沼支社長じゃないわ。父よ。父がこの仕事をするようにわたしに言ったのよ。だから、そんなに危険な仕事だとは思わないわ。鷺沼支社長も「今日は特別で、普段はそんなに忙しくない」っておっしゃっているわ」

「いいから、直ぐに辞表を出せ。今直ぐに、分かったな!」

賢は直感的に、この仕事が祐子に良い結果をもたらさないと感じた。

「あなた、それはできないわ。わたしが無理にお願いして、九州支社が欠員を補充するところに割り込んだんだもの」

「よし、それなら、俺が藤代さんに直接話す。こんな危ないところにお前を一人で置けるわけ無いだろう」

ふたりはそれぞれ食事を済ませてから、また電話することにした。賢は直ぐに藤代肇に電話を掛けた。

「内観くん、君なら仕事に危険は付き物だということぐらい分かっているだろう。わたしも心配だ。だけど、今まで亜希子だって、こういう接客の仕事に就いて来たんだから、大丈夫だよ、九州支社の連中に任せておけば。わたしたちだって祐子に遠くに行つ欲しくないに決まっているじゃないか。できれば、祐子を近くに置いておきたい。だけど祐子は自分から進んで、この仕事に着いたんだ。それを、いきなり辞表を出すことなんてできないだろう」

「どうして、九州なのですか？他には無かったんですか？あの支社長秘書という仕事、どう見ても安全な仕事には見えませんが……」

「いや、無いことはない。ただ、祐子はどうしてもiプロジェクトに絡んだ仕事をしたいと言っている。兎に角少し様子を見てみたらどうだ。わたしも人事部と相談してみる。まあ、少し難しい仕事をさせてから東京に戻した方が、対人折衝という点で祐子にも勉強になるだろう」



「分かりました。できるだけ、早く祐子を東京に呼び戻してください。よろしく願いいたします」

賢は止むを得ないと思った。何か別の方法で祐子の安全を確保することを考えなくてはならないと思った。このままでは明らかに危険だった。自分が九州に移ることは難しい。祐子を透視することも、祐子とテレパシー通信することもできない。それなら、せめて誰か頼れる男に、祐子の近くに居て守ってもらうほかない。賢の頭に橘のことが閃いた。以前橘が、福岡にある大学の研究室から声を掛けられていると話していたことがある。賢は自分が祐子の傍に行けない無念さを押し殺して、可能性を打診してみることにした。橘は直ぐに乗って来た。4月から採用してもらえるかどうか当たってみると言った。橘が近くに居れば、祐子の不安もある程度は解消されるし、いざという時には、祐子を救い出してもらうこともできるかも知れない。賢には今のところそれ以上の策は見出せなかった。そのとき賢の胸に熱い意識が流れてきた。亜希子だった。

「賢さん、今日会えませんか？」

テレパシーで語り掛けて来た。賢は空しい気持ちを分かち合える相手を求めていたのかもしれない。直ぐに了解した。

それから30分後に二人は六本木のレストランボニータに居た。

「わたくしも祐子お姉さまのことが心配です。父はどうして、祐子お姉さまを九州なんかに行かせたのでしょうか。祐子お姉さまも、何故父の提案をそのまま受け入れたのでしょうか？わたくしにはどうしても分かりません。いくらあなたの近くで働きたいからと言っても、そんなに性急にことを運ばなくてもいいと思うのですが……」

「そうなんだ。恐らく祐子自身、昨日の事前打ち合わせの時点で、不安は感じていたはずだ。それほどまでに俺の近くに居なくては行かないのだろうか？俺は、意識と愛があれば、空間的にどれだけ離れていようと構わないと思うのだが……」

「わたくし、何となく祐子お姉さまの気持ちが分るような気がします。女は愛する人の近くに居ないと駄目なんです。わたくしはあなたの心に

繋がっているという確信があります。あの、由美さんもそうでしょう。だから、何時でもあなたの元に飛んで来れます。あなたのことも、今どうしておられるかも直ぐに分ります。でも祐子お姉さまは、物理的にあなたの近くに居るしか、あなたの存在を実感できないのではないのでしょうか？だから、必死なのだと思います」

その言葉に、賢は祐子がわが身を省みずに、賢に対する愛を貫こうとしていることを思った。それは愛というより情に近いかもしれない。祐子は身も心も総てを自分に委ねていた。これほどまで自分を愛している祐子を自分の近くに置かないことが、如何に残酷なことか思い知った。賢は自分の行為を責めると同時に、胸が張り裂けるような悲しみに身体が打ち震えるのを覚えた。

「亜希子、一緒に祐子の無事を祈ってくれないか？」

「はい、お祈りいたします」

ふたりはその場で暫く瞑目し、祐子が無事に勤められることを祈念した。亜希子はまだ暫くの間賢と共に過ごしたかったが、賢が愛子のことを心配した為、やむなく引き上げることに同意した。ふたりは表参道駅で別れた。賢は一人になると、すぐ祐子に電話を掛けた。祐子は待っていた。

「祐子、食事は済ませたのか？」

「うん。今済ませたところよ。ねえ、あなた、とっても会いたいわ。何時かこっちに来ることないの？」

「暫くは予算策定に掛かりきりだ。だけど、今度の土曜日に会いに行くから、それまで、身を守れよ。特にそのハイパートレードとかいう会社の社長には気を付けろよ」

「うん、大丈夫よ。勿論わたしは気を許さないし、支社長も防衛線を張ってくれているから」

「祐子、それに4月から鹿児島島の橘さんに、お前の近くに居てもらえるようになるかも知れない。そうすれば安心だし、藤代社長にも早く東京に戻すように進言しておいた。こっちの方はあまり当てにならないかもしれないけどな」

「大丈夫よ。わたしは自力であなたの近くに近づくから。あなたもわたしを引き寄せてね」

「勿論だ。人事に関係する異動の話があるときは、祐子のことを第1優先で扱うよ。早く戻って来いよ。俺もお前が近くに居ないと、脚が地に着かない」

「脚だけなの？他はへいっっちゃら？」

「そんな冗談が言えるようなら、少しは元気になって来たな」

賢がアパートに戻ったのは8時半を回った頃だった。部屋には原智明が来ていた。愛子は入り口まで跳んで来た。

「ただいま」

「賢パパ、お帰りなさい。原さんが来てくれたのよ」

「そうか、原さん、済みませんでした」

賢は部屋に入りながら、ソファーに腰掛けている原に声を掛けた。

「お帰りなさい。本当は愛子さんに電話で呼び出されたんですよ」

「やっぱりそうか。愛子、あんまり原さんばかり頼っちゃ駄目だぞ」

「いいえ、いいんです。僕も独りで居るより楽しいし、それに愛子さんが夕飯を作ってくれるんで、僕は助かるんです」

「そうですか。そう言っていただけで助かります。愛子は我が儘を言いませんか？」

「賢パパ、大丈夫よ。わたし、原さんにいろんなことを教えてもらっているのよ。原さんってほんとに天才よ」

「また、そんなことを言う。さっきから、そんなことばかり言っているんです」

「だって、そうでしょう。原さんが、わたしに「原智明語録」を順番に教えてくれるんだって」

「所長が作った僕の話したことを纏めた語録なんですけど、内観さんご存知ですか？」

「よく知ってます。原さんが失踪している間、結構勉強させて貰いましたから」

「賢パパ、お食事は？」

「うん、亜希子と会って済ませて来た」

「ふうん、じゃ片付けるわね・・・ねえ賢パパ、賢パパでも勉強することあるの？」

「愛子、僕はまだ、何も知らないんだよ。この世界のことも、自分自身のことも。原さんの語録にはこの社会が陥っている誤りや矛盾を糺す言葉が沢山あるんだ」

「へえ、そうなんだ。それでね、今日は面白い言葉を教えてもらったのよ。賢パパ、ごくみって分る？昔の女優のことじゃないわよ」

原はにこにこしながら聞いている。

「あの、語録の確か3番目の「ごくみを大切にしないでだめだ」っていう、あのごくみのこと？」

「そうなんです。今日は第1回目だから、小学校2年生が共感をおぼえた話から説明したんですよ」

「あら、原さんたら、わたしのことを馬鹿にして。わたしは中学2年生よ」

「はっはっは、愛子には意味が分らなかったんだ。はっはっは」  
賢も笑ったので、愛子は膨れた。

「賢パパは分るの？だって、聴いたこともない言葉じゃない」

「実は僕も知らない。知りたいと思っていたんだ」

「なんだ、わたしと同じじゃないの。いじわる」

賢は愛子が明るくなっているのに、喜びを感じていた。

「で、どういう意味なんですか？ ごくみって」

「じゃ、愛子さん、復習ですよ。内観さんに説明してみて」

「分ったわ。じゃ説明するわね、賢パパ。ごくみにはいろんな意味があるのよ。一番重要な意味は、5つの組という意味。「ご」は数字の5で、この世界は経綸（しくみ）でがんじがらめになっていて、それを乗り越える為には5組でなければならないっていうことのようなの。経綸（しくみ）は4組（よんくみ）と書くのよ。原さん、この経綸（しくみ）の

説明がよく分らなかったわ」

「うん、一寸難しいかもしれないね。じゃ、続きは僕が説明するよ。愛子さんも、その内に段々に分かってくるよ。いきなり分るのは無理かもしれない。もう一度よく聞いていてください。・・・経綸（しくみ）はこの世界が人間社会として成り立ってゆく為に、人間が自分たちで作り上げた決まりごとや習慣のことなんだ。だからしくみ(経綸)と言ってもよしみ(世組)と言ってもいいんだけどね。本当はこのしくみの4という数字が現在の僕たちの状態を表わしているんだ。4の段階の前に、そのひとつ前の段階2という数字の意味から説明した方が分るかな。わたしとあなたの融合が2という数字の段階で、2次元段階なんだ。漢字で書くと仁組という文字を書いてにくみと読むんだ。仁（じん）つまり人を愛しむこと一つまり、愛を確立する段階だ。わたしとあなたの直線的な関係の段階だ。その次が4で、4という数字はそれを1段広げてわたしとあなたと他者の存在を含めた融合の段階を意味するんだ。方向としてはにくみの直線とそれと直行する方向の直線をクロスさせて、十字架を作るんだ。そこで、平面的な広がりが出てくる。しくみのその他者との融合の為に人間はあらゆる経綸（しくみ）つまり、組織や法律や制度を作って、調和を図ろうとするんだ。最初はそれで社会としての調和が出来、みんなが平和に生きていけるようになるんだけど、社会が成熟するとしくみが足枷となって、人間は鳥籠の中の鳥になってしまうんだ。それと、人間が直接大自然と対峙するような場合は、しくみに囚われていると、不適切な行動をとってしまう場合もあるんだ。現在の社会が丁度その状態に陥ってっているんだ。愛子さんは覚えているかな、あの東日本大震災で沢山の人たちが亡くなったでしょう。あの時は500キロメートルという広範囲に渡って沿岸地帯を津波が襲った。あの悲劇は勿論自然の猛威の前に、人間が為す術もなかったということでしょう。ところが、あの地域に住んでいた人たちは、あの津波の来る前から巨大津波についてあらゆる対策を打ってきていたんです。防波堤として予想される津波の高さを超える堤防を築いたし、沢山の避難所を作った。大学

や大学院の教授たちが先頭に立って防災計画を立てたんだ。その防災計画に則って防波壁を築き、避難所を作り、避難路の整備もした。そして、その仕組みが住民全体に浸透するように、何度も何度も訓練をしてきた。沢山の仕組みを作って、いざ津波が来たら、その仕組みの通りに行動すればみんな救われると教えてきた。その防災計画は明治の頃起きた大津波を想定して立てられたんです。だから、みんな安心してた。この仕組みがあれば、絶対大丈夫だと。そしてあのマグニチュード9.0という大地震が発生し、その直ぐ後で巨大津波がやって来た。警報が出たときは、まだ避難するだけの時間的余裕があった、みんな、防災のしくみで築き上げた避難所に殺到した。その避難所は3、4メートルの高さの津波には耐えられる構造になっていた。大学教授や、大学院教授は津波が来たら、鉄筋の建物の3階以上に避難するようにと指導していた。多くの人たちが避難した後、あっという間に目の前にまで津波がやって来た。みんな固唾を飲んで津波を見つめていた。しかし、誰も、その津波が自分たちの居る避難所の中にまで入ってくるとは考えなかった。安心してた。その避難していた人たちが大勢流されて、命を落としてしまった。ところが、ある町の子供たちの反応は違っていた。教授たちが教えたとおり、上級生が下級生を導いて避難所として指定されている小学校校舎までやってきたとき、何人かの子供が津波の巻き起こす煙霧を見て叫んだ。「津波が襲ってくる」それを聞いた子供たちを引率していた教員が子供の感覚に反応した。その判断は思考ではなくて、直感で為されたんです。そして、小学校の校舎に入らずに、もっと高い山に向かって走るように子供たちに伝えた。子供たちは必死になって山に駆け上がった。その直ぐ後で、津波は小学校の最上階まで押し寄せてきた。子供たちは全員助かった。教授たちの作った仕組みに従った多くの大人たち、幼児たちの命は奪われてしまった。このとき、子供たちの意識の中に働いたのが、しくみを超えたごくみんなだ。ごくみに繋がる意識なんだ。だけど、これまで社会のルールの中で生きてきた多く人間は、仕組みがなくては行動することがままならなかった。率先して津波対策を進め

ていた教授の中の一人が、津波の後の記者会見で言っていたよ。「人々には具体的なイメージを植え付けなくてはならなかった。僕もこのような巨大な津波が来る危険性があることを薄々感じていた。しかし、現実的にできることをしなくては人々が動かないので、そのようなモデルを作った」と。これは、学者の言葉じゃない。仕組みに縛られた官僚の言葉だよ。もう、こういう生き方をする時代は終わるんです。これからは意識を開いて、3次元にとらわれない認識力を働かせて生きなくては、人類は生き延びてゆくことができなくなります。あの時、確か同じ時期に、今ではほとんど危険性が無くなった原子力発電所の事故が起きて、世界中の人々が日本の原子力発電所事故の収拾プロセスに釘付けになっていました。あれもしくみのもたらした弊害です。東日本電力の人たちは、この原子炉は絶対安全だと豪語していた。それは、過去に起きた地震や津波に耐えられる仕組みで構築されていて、どんなことがあっても何重にも構築された安全装置が作動するから、事故は絶対起きないと言って、外部の研究機関がどんなに問題点を指摘しても、大丈夫の一点張りだった。しかし、その安全性はもろくも崩れた。巨大津波で電源が失われ、その安全装置が機能しなかったんだ。「想定外の津波だった」この言葉はあの大地震のときに、頻繁に使われた関係者の逃げ口上だった。一部の人たちはその想定された内容に問題があったと非難した。だけど、僕は、想定すること事態に問題があったと思っているんだ。何かを想定して仕組みを作ると、必ず想定外が起きる。愛子さんは「例外のない法則はない」という法則を知っているかな？つまり、仕組みを作ったら、想定外を想定しないと必ずリスクが伴うということなんだ。人間が作った仕組みに基づいて行動している限り、絶対安全なんていうことはありえないのに、自分たちの構築した仕組みにどっぷり浸かって、何も感じなくなってしまうロボットのような人たちは、事態がのっぴきならない状態にならないとまったく反応しない。それがあの想像を絶する事故に繋がったんだ。僕はあの事故を見て、増上慢に陥った人々の末路を見ているような気がしたんですよ。あの時は、津波に被災された

人々が苦しい避難生活を余儀なくされていたでしょう。覚えていますか？あの時、政府は法律で禁じているという理由で、瓦礫に遮断され、孤立している地域の人たちに物資を運ぶ唯一の手段、民間のヘリコプターを使っての物資の投下を許可しなかった。それしか方法がないことは、誰でもわかった。そのほかにも、直ぐに実施することのできなかつたことが沢山ありました。法律という仕組みがそれを阻んでいたんだ。本来人間を守るために作られた法律で、人間の命が奪われていったんです。そのため、折角津波を逃れて助かった人々の内の多くの人たちが亡くなりました。自衛隊と米軍ヘリが孤立地域に援助物資を配送していたのが印象的だった。こういうことは数え上げたらきりがありません。人間が鳥籠から出て一步前進する為には、4の段階から5の段階に移らなくてはいけない。3次元の中で構築された仕組みの上に4次元に通じる軸を設けることなんです。それは3次元平面的な認識から4次元立体的認識に移ることを意味しています。そう、この社会を固定的な概念から、あらゆる可能性を包含した発展的な概念にパラダイムシフトすることなんです。そうしないと、人間の発展は止まってしまう。それは後退、ひいては一寸難しいけど一宇宙の死に繋がってしまうんです。だからごくみ様が大切なんです。これが、小学校2年生にしか共感されなかつたから、僕は一寸残念だったんだけどね」

「ひえー、原さんって、だから天才だって言うんですよ」

愛子が驚いたように声を上げた。賢が言った。

「なるほど、素晴らしい説明ですね。ごくみとはそういうことだったんですか？僕は今の話を聞いて、ヤブガラシの花を思い出しました。午前中に花が咲いて午後には散ってしまう。その花の真ん中にきちんと並べたように、4つのオシベがつんと立ち上がるでしょう。その4つが下に広がる4つの花びらを支配しているようです。でも、その4つのオシベは午後には花びらと一緒に落ちて、真ん中のメシベだけが残る。それが丸い萼（がく）の平面に突き出だして、次の段階を支配しているように見えます。そして、そのメシベを支えるガクは甘い蜜で満たされ、



ピンク色に変わって行きます。まるで、次の世界が至福の世界に思えます。原さんの説明したごくみをヤブガラシの花の象徴絵で見ているようです。ごくみの意味もさることながら、よく語彙と一致しましたね」

「ええ、僕はこういうのが大好きで、あの所長の幽閉されている場所を発見できた暗号があるでしょう、ああいう風に単語やひとつひとつの文字のもつ意味や響きの重要性を意識しているんです。ひとつの文字、例えば「あ」だけでもかなりの意味を持たせられるんです。人の言葉は種類が多すぎるんですよ。だから誤解が生じる。本当は数字だけで意思の疎通が図れるはずなんです。賢さんの花を用いた説明もちょっとしたものです。見事です・・・横道に逸れちゃいました。それじゃ、愛子さん、ごくみの2番目の意味は？」

「えーと、ご、ご、そうだ、「相手の苦しみを観抜くこと」という意味だったわ。「ご」が互いの互、「く」が苦しみの苦、「み」が賢パパと同じ観るという字だったわ。「相手を慈しんで、苦しみを観抜いて、取り除く」だったわね。まるで12面観音様みたい」

そう言うと愛子は麻子の遺骨に上体を向けて両手を合わせた。

「そう、よく憶えられましたね。しくみは四つの苦しみを持つ身で、この3次元の人間の姿を示しています。漢字で書くと、“4（よん）”と苦しみの“苦”と身体の“身”と書けます。仏教で言う四苦八苦の4苦です。生老病死です。ごくみとは、互いの苦しみを抜いて、慈悲の心を持つことです。自分の苦しみの中で悶々と生きるのではなく、あらゆる存在に対して慈悲の心を持って生きることなんです。それがごくみの2番目の意味です。では愛子さん、次に3番目の意味は？」

「今のに似ているの。そうだ、極という字と今の観るという字で、極観（ごくみ）だわ。ずっと奥深くまで観察すること。それから4番目が同じ極という字に体（からだ）という意味の身を書いて極身でごくみと読んで、意味が少し変わって、自分の身体を極めること、限界にまで近づけることだったわ」

「そう、大体そういうことだったですね。でも最初に言った「5つの組」

の意味が一番重要なんです。他は宗教とか、哲学でも言っていますから。その5組（ごくみ）は実は組という文字に大切な意味があるのです。それは実次元の世界と虚次元の世界の両方の5の組が必要だということなのです。だから組なのです。いいですか。この3次元だけの飛躍じゃ駄目なんです。虚の次元4次元的な飛躍も同時に必要なのです。あくまで、ひとつの組として」

賢は驚いた。自分もそういう感覚は持っていたが、これほど理路整然と説明されると、脱帽せざるを得なかった。

「原さん、素晴らしいです。やはり、あなたは次の時代の橋渡しになる方です。わたくしは今まで、これほどはっきり形に描くことはできませんでした。見事です」

原も賢に褒められて、ほうほうの態（てい）でマンションを後にした。愛子は感激して、呆然としていた。

「愛子、お風呂に入りなさい」

「はい、賢パパ、でも、原さんって本当にすごいわ。こんな言葉が30もあるんでしょう。わたし、びっくり。学校の先生でもこんなことは知らないと思うわ」

「いや、学校の先生ばかりじゃなくて、大学の先生でも、政治家の先生でも分らないと思うよ。第一、彼等は普通この社会という籠の中のことしか見えていないからね。兎に角、お風呂に入りなさい。もう宿題は済んだのか？」

「ううん、お風呂から出たらやるわ。簡単なもの。10分でできちゃうわ」

愛子からあの恐怖心が消えていた。賢は改めて、原の偉大さに敬服した。愛子が風呂に入ったのを見届けてから、賢は再び祐子に電話を掛けた。

「あなた、ありがとう」

祐子も元気な声で応えた。

「何事も無いな。いいか、いつも俺のことを心に描いていろよ。おれが常にお前に意識を向けておくから。そして、いつも意識でお前を包んで

守っているから」

「あなた、愛しているわ。土曜日が待ちきれないわ」

「じゃ、おやすみ」

「おやすみなさい」

祐子は小山田の視線が気になった。昨日とは違い、小山田はビジネスライクな話し方をした。しかし、時々自分の方に流す視線が、何らかの意図を含んでいるように祐子には感じられた。祐子は賢に意識を向けた。自分を防衛してくれるように、賢に向けて、通じないと分かっているテレパシーを送った。

「鷲沼さん、その金額じゃ、通常の取り引き金額に弁当代を載せた程度じゃないですか。何も無理に買っていただかなくても、他にもお客さんがいますからね」

「そんなことを言わないでください。これが当社としても精一杯の金額なんです。商品に組み込んだら、もう利益はほとんど出ないほどですよ。社長だっのご存知でしょう。最近の液晶パネルの価格の暴落を」

「なんかそうらしいですね、じゃ、インジュウムだけ外したらどうですか？こちらは構いませんよ。何も全部揃えなくたっていいんじゃないですか？その代わり、価格にはあと1.5パーセント載せて貰いますけど」鷲沼も攻勢に出た。

「そうですか、なあ祐子さん、S社とどのくらい開きがあるか分かるか？」祐子はS社というのがどこの企業を指しているのかふと考えを巡らせたが、今回取引を予定していない金属材料最王手のセンチュリー・マテリアル社のことだと思い、鷲沼が駆け引きをしていることを見抜いた。それから、おもむろに自分の書類かばんを開け、中から他社の資料を取り出して、確認する振りをした。

「支社長、S社は5商品を当社の要求に合わせて供給する場合、こちらにご提示させていただいている価格より1パーセントほど高くなっています。でも、S社の場合は納入遅滞の場合の保証が、遅滞によって発

生した損失の50パーセントとなっています」

鷺沼は「うーん」とうなり声を上げ、少し考えている風だった。小山田の顔色は変わらない。しかし、この日ふみよと呼ばれていた秘書の代わりに来ていた女性が、少し慌てた様子を見せた。祐子とさほど年齢差は無いようだったが、祐子より小柄で理知的に見える。彼女は自分の持参した茶封筒を小山田に渡そうとした。小山田は右手を少し動かして、軽く2度頷いた。その資料は要らないということをその動きで示していた。祐子は、小山田が彼女の行為を抑えようとしたのだと見て取った。

「支社長、この後のS社との交渉の後で、もう一度お話させていただいてはいかがでしょうか？小山田社長様もどうやら、ぎりぎりの線をお出しになっておられるようですから」

鷺沼はもう一度「うーん」と唸って、両腕を組み、小首を少し傾けて考え込んでいる様子を見せた。小山田が言った。

「じゃ、福岡タワーの展望室から飛び降りたつもりで、鷺沼さん、どうでしょう、全商品であと1パー載せてくれたら手を打ちましょう」

鷺沼はまだ手を組んで考えている。

「うーん、そうですね、じゃあ、こうしましょうか？とりあえず、今日のところは価格回答として御社がこちらのご提示させていただいた、価格に更に1パーの上積みをお望みということにして、持ち帰らせていただきます。本社とも相談してみます。なにしろ、損益ぎりぎりの商売なんで、当社も必死なんです」

その言葉を聴いて、また小山田の秘書役の女性が、茶封筒を持ち上げ、小山田に渡そうとした。今度は少し小山田の顔を凝視するような態度だった。祐子は勝てると思った。少し声を抑えて囁くように鷺沼に言った。

「支社長、わたくしこの後、直ぐに本社と連絡を取ります。資材部長から督促を受けていますので、今日中に結論とまでは行かなくても、方向だけでも回答しなくては……」

鷺沼が不機嫌そうに言った。

「祐子さん、あまり焦らせないでくれ、ちょっと悩んでいるんだか

ら・・・こちらから調達する方がS社より早く入手できるんだ。だけど、1パー載せたら、多分支社の信用は失墜だしな・・・小山田社長、これからも取引をさせていただくパートナーとして、どうですか、あの価格でご了承いただけませんか？できれば、S社と交渉せずに済ませたいんですけど」

また、秘書役の女性が小山田の方に顔を向けて、茶封筒を持っている手をわずかに小山田の方に向けて動かした。小山田はそれを無視して言った。

「ワシは福岡タワーから3回くらい飛び降りた気分ですよ。もう、血だらけで瀕死ですよ。支社長にはかないませんな・・・いいでしょう。ご提示の価格で手を打ちます。それじゃ、後は秘書同士で詳細を詰めるってことにして。どうでしょう？」

「ありがとうございます。僕も何とか首の皮が繋がりました。祐子さん、食事の後で、直ぐに社に戻って本社に今日の件を報告してくれないか。僕は、そのまま客先に寄ってから戻る」

「はい、支社長承知致しました。お帰りは予定通り5時でよろしいですか？」

「うん、そうしておいてくれ」

「まあ、仕事の話はここまでにしましょう。千恵子君、直ぐに昼食にでももらってくれないか」

「はい、社長」

そう言うと千恵子と呼ばれた秘書役の女性は席を立ち、店のマスターと思しき男の所に行った。何か話している。

「祐子さん、それにしても立派な秘書振りですね。鷺沼支社長どうですか、うちのこの千恵子とトレードしませんか？今後、お宅との取引を第1優先にするということにしてもいいですよ」

「また、ご冗談を。僕は祐子さんを手放す気はありませんよ」

「祐子さんを、さん付けで呼ぶなんぞは、やはり鷺沼さんも、祐子さんに頭が上がらないんですね。それともぞっこんなのかな？」

祐子は「また始まった」と思った。頭の中を賢のイメージで一杯にして「あなた、守って」と念じた。もう、小山田の話す声は意味を失った。食事は30分ほどで終えた。鷺沼は祐子を乗せて社有車で一旦支社に戻ることにした。客先の訪問はそれほど急ぐ必要がなかった。レストランを出るとき、小山田が未練がましく言った。

「祐子さん、今度は詳細の詰めのお会いしましょう。内は秘書だけに任せておけませんから、ワシも詰め会議に参加します」

祐子はただ少し会釈をただけで返事をしなかった。小山田は鷺沼と握手を交わした。祐子は鷺沼の後に従った。

社有車に乗ると、直ぐに鷺沼が祐子に言った。

「祐子さん、なかなか大したものですね。よく相手の考えを捕らえられましたね。感心しましたよ」

「いいえ、支社長が機転を利かせられたので、それに附いて行っただけです。あの価格でよろしかったのでしょうか？」

「うん、大丈夫だ。あれでも本社の指値より1パーほど下げてある。ただ、リスクの分が高く付かなければいいんだが・・・それにしても小山田の奴、福岡タワーから飛び降りたつもりなんて、洒落にもならないことをよく言うもんだ。僕は、「あそこは窓があるから、飛び降りられないよ」って言ってやりたくて、うずうずしていたんだ。はっはっは」  
鷺沼は上機嫌だった。

支社に戻ると、祐子は一旦、今朝総務部長に紹介された時に与えられた席に着いた。鷺沼は15分ほどして出掛けた。本社への連絡は既に鷺沼自身が行っていた。祐子はスケジュールの再確認をし、今日の議事録を纏めた。祐子の席は総務部の課長の横に設けられていて、机の上には社内ネットワークに接続されたPCと直接支社長のPCの中を覗ける端末が置かれている。行き先掲示板は総務部の部員とは別で、支社長と同じ白板の右下角に秘書という枠があり、そこに記入するようになっていた。支社長と同行する場合は何も記載しないように、今朝総務部長から言われた。祐子は支社長が自分の近くに来て「じゃ、行ってくる」と言

うと、席を立って頭を下げ、「行ってらっしゃいませ」と言った。支社長が入り口の扉を開けて出てゆくと、祐子は直ぐに行き先掲示板の所に行き、大きめの字で「客先」と記入した。祐子は席に戻ると議事録を作成し始めた。総務部内の何人かの視線が時々自分に向けて注がれているのを感じる。議事録を書き終わると、一部は支社長の端末の議事録ディレクトリーに転送し、記録は自分のPCの会議記録のディレクトリーに日付を付加したファイル名で保存した。祐子はゆっくり席を立つと、行き先掲示板の「秘書」の枠の中に外出と記入してロッカールームに行き、コートや羽織りハンドバッグを持って外に出た。携帯電話を購入するつもりだった。外は曇り空で、寒々しかった。祐子は賢に向けてテレパシーで語りかけた。通じないとは分かっているけど、祐子にとってはそれで満足だった。

「あなた、守ってくれてありがとう。今日は上手くいったわ。ハイパートレード社の社長に負けなかったわ。今から携帯を買いに行くわ。ついでに前の携帯の解約もして来るから、これからは新しい携帯に電話してね。買ったなら、あなたに一番に掛けるから、楽しみにしてて。あなた、愛してるわ」

祐子は小さな声で何時ものテレサテンの歌を口ずさみながら歩いた。WEBで携帯電話の販売店を検索してあった。支社から500メートルほど先に紛失した携帯を扱っている店舗があるはずだった。暫く歩いていると、後ろからクラクションの音がした。祐子が振り向くと、小山田だった。プリンセスを自分で運転している。祐子は戦慄を覚えた。直ぐに賢に助けを求める祈りをした。

「やあ祐子さん、偶然ですね。今丁度取引先から戻ったところなんですよ。どちらにおいでですか？」

祐子の歩く速度に合わせて徐行しながら、車の窓を開けて小山田が話し掛けた。祐子は軽く頭を下げた。

「直ぐそこの携帯電話ショップまで行くところです」

「そうですか、外は寒いですから送りますよ」

祐子は小山田がそう言うだろうと思っていた。平静を装って応えた。

「結構です。運動不足で少し歩きたいので」

「まあ、そう言わずに、どうぞ」

そう言うと、小山田は自動車を加速して3メートルほど先に止め、車から降りて来た。そして祐子の方に歩み寄ると、

「今日はありがとうございました。少し車の中で先ほどの契約の話などをしながら、店まで送りますよ」

祐子は立ち止まった。

「小山田社長、仕事とわたくしごとをきちっと分けてください。わたくしにはフィアッセがおります。上長の指示が無い限り、どんな男性とも個人的に話しは致しません。失礼します」

小山田は執拗に

「まあそう言わずに……」

と言って、祐子の背中にするりと手を回そうとした。祐子はとっさに駆け出した。心の中で「あなた、助けて」と叫びながら走った。そのとき後方からクラクションの音がした。香川だった。K・ダンディを運転している香川が、クラクションをもう一度鳴らし、小山田のプリンセスを追い越してその前に止めた。香川は直ぐに車から降りて、祐子の方に歩いて来た。祐子も走るのを止めて立ち止まった。小山田はきまり悪そうにそそくさと車に戻ると、そのまま車を発進させて走り去った。

「お嬢様、いえ祐子さん、一体どうされたのですか？」

「小山田社長が車に乗ってしつこく言って、わたくしを追い掛けて来たのです」

「えっ、あのハイパートレードの小山田社長ですか？今のがそうですか？」

「はい、わたくし必死に逃げました」

「しょうがない奴だな。お嬢様、暫くお一人で出るのはやめた方がいいですよ。あの小山田という男は女癖が悪いので有名ですから。そのうち、また、別の女性を追い掛けるようになるまで、支社長と同行したほうが



いいですよ。それか、わたしにおっしゃっていただければ、何処にでもお連れします。それも無理ならタクシーを使うかしないと」

「ありがとうございます。助かりました」

「どちらに行かれるのですか？」

「その携帯電話ショップまでです」

「分かりました。僕が同行します。用事が済むまでお待ちして社までお送りしますよ」

「ありがとうございます」

祐子は助かったと思った。携帯電話の購入と契約は30分ほどで済んだ。香川はそれまで車の中で祐子を待った。店から祐子が出て来ると、車から降りて後部座席のドアを開け、祐子を乗せてからドアを閉めた。車を発進させると、香川が言った。

「もう、用事はお済ですか？」

「はい、香川さん、本当に助かりました。ありがとうございました」

「いいえ、とんでもございません。当然のことですよ。直接社に戻ってもよろしいですか？」

「はい、ありがとうございます」

祐子が何度も礼を言うので、香川は恐縮し、雲の上の人に感謝されることで、飛び跳ねたいほど嬉しくなった。

「お嬢様、困ったことがあったら直ぐにわたしに言ってください。最善を尽くさせていただきます。それと、他の人が居ないときはお嬢様と呼ばせていただくのをお許してください」

「はい」

その日は夕方まで特にこれといった仕事は無かった。祐子は携帯電話が通話可能になるのを今は遅しと待ちわびた。開通すると直ぐに賢にメールを送った。

「あなた、今日のH・T社との交渉は上手く行ったわ。ずっとあなたに守ってもらっていたから、予定通りの価格と納期を確保できたわ。だけどその後で、電話を買いに出たとき、路上でH・T社の社長に迫られ、

追い掛けられたのよ。心の中であなたに助けを求めたの。あなたが守ってくださったのね。そこを車で通り掛った i・P の香川さんが助けてくださったわ。仕事終わったら、必ず電話してね。番号は 020-6248-2756 よ、この電話追跡も出来るのよ。返事待っている。愛してるわ」

支社長は 5時半に戻って来た。祐子は規定の勤務時間、6時に退社することが出来た。支社のビルから出ると、そこに香川が車を横付けして待っていた。香川はホテルまで送ると言った。ホテルまでは歩いて 7、8分ほどなのだが、香川は祐子を気遣ってくれた。祐子はホテルのエントランス前で、香川に何度も礼を言った。香川は顔を紅潮させて恐縮していた。祐子はそのままホテルのレストランで夕食を摂った。携帯電話を手に入れたことで、奇怪な国から、また、元の世界に戻って来たような妙な安心感に包まれていた。しかし、一人で食べる夕食は決して味わって食べる食事ではなかった。ただ食物を口に押し込んでいるような感覚がした。祐子はその感覚を客観視しようとした。そして、こんなことを賢に言ったら叱られると思った。祐子は目をしばたさせ、意識をはっきりさせて食事に全力で望んだ。やっと、エビフライの感触が伝わってきた。

部屋に戻る途中で携帯が鳴った。賢からだ。勿論賢以外の人間は知っているはずは無いのだが、どうしてか、「だれからだろう」と一瞬思った。そして、そう考える自分の思考パターンに疑問を感じた。

「祐子、大変だったな。でも良かった。怪我は無かったのか？」

「うん、大丈夫。メールにも書いたけど、あなた、わたしを守ってくれたでしょう？」

「実は、今日俺の意識に何度か切迫感が生じたんだ。仕事の内容と関係ないところでだけど、何て言うか、そう胸騒ぎみたいな感じだ。だから俺は、お前の周りにバリアを張ることをイメージしたんだ。何回かな、そう、全部で 4回そんなことがあった。その間にも、何度か気分が悪くなることがあった。多分、祐子お前だと思って、バリアを張るイメージ

のほかに、守護霊と指導霊に救済を頼んだんだ。どういう形でも祐子を守って欲しいと祈ったんだ」

「あなた、きっとそのおかげだわ。大体あの小山田社長の最初の交渉のスタンスと謂い、秘書の千恵子さんの動きと謂い、鷺沼支社長の反応と謂い、香川課長が現われたことと謂い、どうしても偶然とは思えなかったもの。あなたに守られているって感じていたの」

「そうだ、祐子その意識を切らせるなよ。俺は遠隔でお前を守る以外に直接助ける手段がないんだから」

「うれしい。わたし、あなたとテレパシーで話すことができないでしょう。それでもテレパシーのつもりで話し掛けているのよ。きっと何時かは通じると思っているの」

「多分、俺には届いているんじゃないかと思うよ。ただ、お前の送っている思念を俺の意識が同調か、検波できていないんじゃないかと思うんだ。おれにもっと、広帯域な受信ができさえすれば、きっとお前の話をキャッチできると思うんだがな。俺はまだ未熟だから……本当に済まない。努力するよ」

「あなた、そんなこと言わないで、悲しくなるから。だって、あなたは亜希子さんや由美さんの考えていることはキャッチできるでしょう。なのに……どうしてなのかしら。きっと、わたしの愛のレベルが低いだよ。こんなにあなたのことを愛しているのに……」

賢は祐子が泣き声になっているのに気付いて、宥めるように言った。

「祐子、いいか、俺はお前とふたりで居るときが一番自分自身の核に近付けるんだ。特に、あの一体感は何のどんな体験でも得られない。お前もよく知っているじゃないか。お前と俺はほとんど同じなんだよ。昨日原さんに言われて改めて思い起こしたんだ。俺とお前はもう、2次元的愛の段階を超えていると思うんだ。きっと次の段階、つまり他の存在との融合の段階に移らなくては駄目なんだ。分かるか？周りの総ての存在と一体感を持つ段階にきているように思うんだ。だから、お前も、俺のことを常に意識の核に据えて、他者への愛を、慈悲のレベルまで高めるよ

うな方向に自分を向けて行けよ。いいな。俺もそうする、いや、もうそうし始めている」

祐子の啜り泣きが止んだ。

「あなた、それでも、寂しいわ。あなたが近くに居ないと辛いわ」

「よし、若し辛くなったら、いいか、目を瞑って、俺とふたりで過ごしたときのことを想像しろ。そして、俺がそこに居ると思え。其れを続けられれば、俺は本当にお前の横に存在するから。疑っちゃ駄目だぞ。見えなくてもそこに居るから。いいな」

「うん、分ったわ。そうする。あなた、愛してるわ」

「おれも、お前を愛している。この宇宙の中で、一番愛している」

賢がマンションに戻ったのは7時半頃だった。この日は原智明が所長と会って夕食を共にすることになっているので、愛子が夕食の支度を整えて一人で賢の帰りを待っているはずである。賢は、愛子がトラウマを克服でき、もう恐怖を抱くことは無いと確信していた。賢が入り口の扉を開けると、愛子がいきなり抱き付いて来た。賢は一瞬、愛子がまたトラウマで恐怖に怯えていると思った。愛子は確かに怯えていた。また、得体の知れない男に追い掛けられ、マンションの部屋に駆け込んだのだった。それでも愛子は夕食の支度をしてあった。愛子は暫くの間、抱きついたまま賢から離れようとしなかった。

「賢パパ、怖いわ。誰かが追けて来るの。わたし走ったの。思い切り走って、直ぐにゲートを抜けてエレベータに飛び乗ったの。絶対大丈夫だと思ったら、また誰かがドアをノックしたの。何度も何度も。怖くて、わたし、腰が抜けそうになったわ。しゃがみ込んでしまった」

「よし、分った。明日から暫くの間、人を雇って監視してもらおう。だから、びくびくするんじゃないよ。そうは言っても完全に愛子を守りきれるかどうか、難しいかもしれないな。兎に角、追けられていると分ったら今日みたいに逃げるんだぞ。いいな。それにこの間買った警報機があるだろう。あれを何時も持って歩きなさい。いざとなったらそれを使いなさい」

「分ったわ。賢パパ、早く犯人を捕まえて」

「愛子、まだ悪い奴かどうかも分らないだろう。だけど、明日からその男がどういう男か分るまで追跡してもらおうよ。もう心配要らないから、安心して学校とダンスに通いなさい」

「賢パパ、ダンスじゃないよ。バレエよ」

「そうだな。それでバレエは、少しは上達しそうか？」

「まだ始めたばかりだから、ただ一生懸命に練習しているだけよ。昨日は原さんに練習の成果をご疲労したのよ」

「愛子、食事の後で僕にも見せてくれないか？」

「いいわよ。だけど、練習だけだから、賢パパつまらないかもしれないわよ」

「それでもいいよ。愛子の踊っているところを見てみたいんだ」

食事をしながら、愛子は学校の話をした。クラスのほとんどの生徒と友達になったと言った。しかし、やはり少し愛子に偏見を持っている者がいるが、そういうことでは決して負けないと言った。まだ陰湿な嫌がらせはないようだった。

入浴を済ますと、愛子は一旦練習着に着替え、賢にバレエの基本練習を見せた。ソファの背に手を掛けて脚を上げたり下げたりした。

「賢パパ、いい、これがア・テール……そして、これがルルベよ。これを一寸繰り返してみるわね……それからこれがプリエで……これがグラン・プリエ少し繰り返すね」

暫くして愛子は「はいおしまい」と言って踊るのを止めた。賢は拍手をした。

「愛子、随分安定してきたな。前より動きがずっと滑らかになったように思えるよ。俺は素人だから詳しいことは分らないけど」

「先生も「少しずつやわらかくなってきてる」って、おっしゃってくださったよ」

そう言うと愛子は浴室の脱衣所に行って、賢から見えない位置でパジャマに着替えた。漸く子供の大胆さが無くなってきたと賢は思った。

愛子は着替えを済ますと骨壺の前で両手を合わせて瞑目してから、1冊の書籍を手にして直ぐにベッドに向かった。賢が帰宅したときは、何者かに追い掛けられたことで怯えていたが、今はその恐怖心も消え、賢に抱き付くことなく眠りに落ちた。賢は愛子が寝付いたのを確認して、祐子の携帯に電話を掛けた。祐子は喜んだ。祐子の安心した気持ちが伝わってきた。賢もほっとして床に就いた。何時になく意識が冴え渡り、亜希子と由美の心の動きもよく分った。二人とも心は安定していた。

次の日も、その次の日も祐子は支社の中で主にハイパートレード社との契約に関係する業務を行った。祐子は五種類のレアメタルの納期と配送計画、乙中とのコンテナへの積載方法の取り決め、受け渡し、支払方法などに附いて本社の資材部門と連絡を取り合った。詳細の詰めは金曜日に本社資材部の担当課長が来て、事前に支社で打ち合わせを行った後、ハイパートレード社に出向いて行うこととなった。祐子はこの契約で入手するレアメタルが、iプロジェクトのインフラ構築に用いる、部品の材料としても用いられる予定であることを、香川の話から知った。しかしこれは、ハイパートレード社は勿論のこと、一切外部に漏らしてはならないと釘を刺された。レアメタル材料の納入はこの年の8月以降1年間に渡って、毎月日を決めて納入されることになった。総額12億円の規模である。

香川は毎朝夕、祐子の送迎を行った。祐子は香川に次第に親しみを覚えてきた。最初、賢のことを良く言わなかったのが、香川に対しては嫌悪に近い印象を持った祐子だったが、それも話している内に、次第に事実を誤認してのことだということが分かってきた。鷺沼は最初の印象のまま変化しなかった。信頼してよいかどうか、まだ祐子には分らなかった。金曜日の朝、祐子は香川の車に乗ったとき、後方に小山田のプリンセスが停車しているのに気付いた。プリンセスはサングラスを掛けた太った男が運転していた。後部座席に小山田ともう一人別の男が乗っているのが見えた。一瞬祐子の身体の中を冷たい血が流れた。祐子は心の中で賢に助けを求めた。自分の意識が賢の意識と結びついていると考えた。賢

の張ったバリアが自分を防衛しているところをイメージした。香川は何時ものように、穏やかな声で言った。

「お嬢様、それでは出発します。忘れ物はありませんか？」

「はい。・・・香川さん、小山田社長の車が後に附いています」

「えっ？何か用でもあるのかな？だけど、何も言って来ないから、知らんぷりして支社まで行きましょう。用事があれば支社に来るはずですし」  
そう言ったと同時に、プリンセスの後部座席のドアが開いて、小山田が降りて近づいて来た。

「やあ、間に合ってよかった。今日はこれから契約内容の最終詳細確認の段階ですね。ワシの支社でやりますから、直接来てくれませんか？支社長にはワシから電話しておきますから」

祐子は、恐怖心を抱いてはまずいと思った。賢に助けを求める祈りをした。香川が応えた。

「小山田社長、我々は毎朝定例ミーティングを行います。それを行った後で、その日の予定を明確化して、それからその日の業務に移ります。緊急でない限り直接客先や取引先には伺いません」

「君、社長のワシが直接来ているんだぞ。君はワシの頼みを拒否できるほど、そんなに偉いのか？えっ？」

「いいえ、拒否など致しません。当社のルールがございますから、それを踏んでからでないと業務に移れないのです。罰則規定もあります。本日はお約束どおり、担当の者が御社に伺う予定になっております」

「分った。お前はなんという名だ？」

「香川と申します。失礼を承知で申し上げます。もし、わたしに非がありましたら、当社の規定に基づいて処分を受けるつもりです」

「よし、そっちがそのつもりなら、こっちにも考えがある。まだ、今度の契約を取り消す事だってできるんだぞ。お前にその覚悟はあるのか？」

「はい。わたしは間違ったことを申し上げているつもりはありませんから、わたしがとった行動の責任は取るつもりです」

「いい度胸じゃないか。よし、その言葉を忘れるなよ」

そう言うと、小山田は自分の車に戻り、車を急発進させて去って行った。

「香川さん、ありがとうございます。わたくし、怖くて、どうしていかかりませんでした。ありがとうございます」

「いいえ、お嬢様、当然の事をしたまでです。ああいう男はこちらが引いたら負けです。多分、契約については何もできないはずですよ。よく、会社の社長が勤まるものだと思え果てますよ。でも、このままでは澄まさないでしょう。侮辱されたと思っているでしょうから。これからは完全に防衛壁を築いた方がいいと思いますね。僕が支援します」

「香川課長、本当にありがとうございます」

「いえ、お嬢様、当然のことです。あなたは社長令嬢ですし、我々の会社の社員でもあります。支社長の秘書ですし、その上、iプロジェクトのメンバーではないですか。今まで10年以上この会社に勤めてきて、これほど幸せを感じたことはありません。わたしはお嬢様のような方と一緒に仕事をさせて頂いて本当に幸運です。わたしは、体力的にはあまり自信はありませんが、度胸だけは人一倍ありますから、身体を張ってでも、お嬢様をお守り致します。どうぞご安心ください」

香川の力強い言葉に、祐子は涙が流れたが、香川にそれと覺られないように、ハンカチで眦（まなじり）をそっと拭った。香川は外見からすると、どちらかという頼りない男の部類に入ると祐子は思っていた。しかし、筋骨隆々の男よりずっと男らしく思えた。支社に着いて祐子を降ろすと、香川は近くの駐車場に車を駐車する為、その場を走り去った。祐子は香川の車が走り去るのを見送ってから、支社のビルに入った。これまで賢以外に、これほど頼もしく感じる男は見た事がなかった。香川の妻子はさぞ幸せだろうなどと、余計な考えを巡らせもした。

賢は朝、会社に向かう地下鉄の雑踏の中で戦慄を覚えた。特に周囲に危険を感じさせる存在があった訳ではなかった。祐子だと思った。賢は心の中に祐子の周りにバリアを張っているイメージを描いた。自分が祐子の近くに存在しているところをビジョン化した。やがて身体に起きた異常な反応は消えた。賢はラッシュを抜け、大手町の改札を抜けると、直



ぐに祐子にメールを入れた。

「何かあったのか？10分ほど前に可笑しいと感じて意識でお前の周りにバリアを張ったんだ。大丈夫か？」

祐子がメールを受け取ったのはオフィスのデスクに着いてからだった。祐子は直ぐに返信メールを返した。

「ホテルを出るとき、あのH・T社の社長が現われたの。車でわたしを自分の会社に連れて行くと言ったの。小山田のほかに男が2人、車に乗っていたわ。怖かった。香川課長が助けてくれたの。あなたのバリアの力かしら？」

賢は直ぐに返信した。

「お前が俺に助けを求めたから、俺も気付いてバリアを張れたんだ。危険を察知したら、必ず俺を呼べよな」

祐子は嬉しかった。絶対そうしようと思った。それにしても香川の行為は本当に賢の意識の働きなのだろうかと疑問に思った。祐子は多分、小山田が引き下がったのが、賢のバリアの働きで、香川が身体を張って自分を守ってくれたのは、香川自身の意識のはずだと考えた。その日は本社から来た資材部の課長鈴木と打ち合わせを行った後、鷺沼と鈴木がハイパートレード社に出向くことになった。鷺沼の指示で祐子はオフィスに残ることになった。香川はその打ち合わせには顔を出さなかった。祐子が鷺沼と資材部の課長を送り出し、オフィスの席に戻ってから暫くすると、総合受付の女性から電話が掛かって来た。

「受付です。橘さんとおっしゃる方から藤代さんに電話ですが、お繋ぎ致しますか？」

祐子は賢が橘に依頼した支援のことだと思った。

「繋いでください・・・もしもし、藤代祐子ですが」

「ご無沙汰しています。橘です。お元気ですか？」

「ご無沙汰しております。その節はお世話になりました。わたしは元気にしております。橘さんは如何ですか？」

「はい、橘は元気一杯です。ところで祐子さん、こちらに勤務されるこ

とになったのですか？」

「はい、東領製作所の九州支社に勤務することになって、この月曜日から、支社のビルで働いています」

「祐子さん、実は僕は今、福岡に居るんですよ」

「えっ？ どうしてですか？」

「全国高校生物教諭連絡会という会議が福岡のシティホールで開催されているのです。昨日から今日に掛けての開催で、今日の3時半に終了する予定なんです。僕はその後で、少し大学の方に寄って、先日の助手の話をして来ようと思うんです」

「そうですか」

祐子は賢が橘に頼むと言っていた、自分のサポートについては黙っていた。

「ええ、多分1時間か、精精2時間くらいで話は終わると思うんです。その後で、祐子さん、一緒に食事でもしませんか？ 積もる話もあるし」祐子も久しぶりに橘に会って、その後の原智明研究会について聞いてみたかった。それに、自分を支援することについて、橘がどう捕らえたかも知りたかった。

「分かりました。それではご一緒します」

祐子の希望で、二人は祐子の宿泊しているホテルのレストランで6時半に待ち合わせることにした。祐子は退社後、一旦ホテルに戻ってからは外に出たくなかった。橘が予約を入れると言った。橘は祐子のホテルから1キロほど離れた所にあるビジネスホテルに宿泊していた。その日ハイパートレード社で行われた詳細打ち合わせの会議も終わり、4時過ぎに鷺沼たちが戻って来た。祐子は会議の結果が気になった。しかし、大きな問題も無く、すんなり終了したようだった。小山田も出席したが、ビジネスライクに話し合うことができたと言った。祐子は、あの朝の自分に対する小山田の不遜な行動は、一体何だったのだろうと思い、不愉快な感情に包まれた。しかし、いつも賢が言っているように、マイナスの感情に捕らわれてはまずいと思い直し、鷺沼の話に意識を集中さ

せた。話を聴きながら鷺沼と資材部の鈴木の話をPCに打ち込み、その場で議事録に纏めてしまった。鷺沼は祐子の業務のさばき方に満足していた。祐子は定時の6時に退社することができた。退社する前に総務部長に呼び止められ、社宅の確保ができたことを伝えられた。詳細は明日話すとのことだった。祐子は礼を言うと、化粧室に向かい、口紅を付け直してからロッカールームで着替えをし、賢にメールを送った。

「あなた、今日、橘さんと夕食をご一緒します。あなた、明日の夜会えるわね。それとも土曜日の朝かしら？早く会いたいわ。愛してるわ」賢から直ぐに返信が送られてきた。

「疲れているんだから、呑み過ぎるなよ。土曜の朝そっちに行くから。待っているよ。詳しい予定はまた後でメールするよ。祐子、気を付けろよ。危ないと思ったら、身を引けよ。そして、いつでも俺にテレパシーを送れよ。俺が意識でお前を守るから」

エントランスから出ると、既に香川が車を横付けして待っていた。車から降りて、後部座席の扉を開き、祐子の方を見て香川が言った。祐子が口紅を付け直したのに気付いたようだった。

「お嬢様、今日はどちらかにお出かけですか？もし外にお出掛けでしたら、わたしがお送り致しますが」

「いいえ、今日はホテルのレストランで、友人と食事をする事になっています」

「そうでしたか。福岡にご友人の方がおられるのですか？それは良かったです」

「いいえ、出張で来ているらしいのです。いつも香川課長にはご心配していただいて感謝しています」

「とんでもございません。何か御用がおありでしたら、何なりとお申し付けください」

「ありがとうございます」

祐子は途中、あの小山田の車に追跡（つけ）られていないか周りを見回したが、その形跡は無かった。祐子はホテルのエントランス前で香川の

車から降りると、辺りを見回して安全を確認してから、エントランスを入った。橘との約束の時間までにまだ15分ほどあったので、祐子は一旦自分の部屋に戻り洋服を着替えた。久しぶりに橘に会うことに、気持ちが晴れる思いがした。祐子は賢の好きなオレンジ色のワンピースに着替えて、もう一度化粧直しをすると、ハンドバッグを手にして部屋を出た。レストランには既に橘の姿があった。橘は祐子の姿を見付けると、席を立てて近付いて来た。

「お久しぶりです。元気そうですね」

「橘さんも、お変わりありませんね。出張大変でしたね」

「いいえ、連絡会なんてのは、形式的な集まりなんですよ。本当に必要なことなんてなんにも議論しないんです。それより、あなたの方がよほど大変じゃありませんか。まあ、掛けましょう。あの奥のテーブルです」  
そう言いながら橘は、隅の4人掛けのテーブルを指差した。ふたりが席に着くと、直ぐにウエイトレスがやって来た。

「いらっしやいませ。メニューとワインリストをお持ちいたしました。お決まりになりましたら、お呼びください」

祐子は、久しぶりにしっかりしたディナーを食べたいと思った。橘が言った。

「祐子さん、いろいろ大変なようで、気の休まる暇もなかったんじゃないですか？今日はくつろいで、ゆっくりしませんか？」

「ええ、わたくしも、久しぶりにしっかりといただきたいと思います」

「それに、ワインなんかもいただきましょうか？」

「そうですね。今日は久しぶりにワインもいいですね。橘さん、選んでいただけますか？」

「分かりました。それじゃ、橘が祐子さんに最適な赤ワインをお選びいたしましょう。そう、赤でいいですか？」

「ええ、今日は、ステーキなんかをいただこうかと思っていますから。赤で結構です」

「僕もステーキにします。久しぶりだな。まさか祐子さんとお食事をご

一緒させて頂けるなんて、夢のようです」

「また、ご冗談をおっしゃって」

祐子がメインディッシュを決めると直ぐに、橘は右手を少し上げてウエイトレスを呼び、フレッシュサラダとポタージュスープ、そして子牛のステーキを頼んだ。ワインはワインリストの最上段の最も高価な赤ワインを頼んだ。祐子は其れが一本2万円もすることを知っていたが、橘に任せ切った。ウエイトレスがステーキの焼き方や、ドレッシングの種類、パンの種類を聞いて立ち去ると、祐子が訊いた。

「橘さん、いつまでこちらにいらっしゃるのですか？」

「はい、明日は休暇をとってあります。ですから、日曜日にでも帰ろうかと思っています。明日はもう一度大学の方に行って話をしてから、土曜日と日曜日の午前中はどこか観光でもしようかと思っていたところです。祐子さん、もしお時間があれば、ご一緒していただけませんか？」祐子の付けている赤い口紅の色が、ほのかな色気を感じさせ、橘の心をくすぐった。

「せっかくお誘いいただいたのに、申し訳ないのですが、金曜日の夕方に内観さんが来るんです。土、日は彼と一緒に過ごすことになると思います」

橘は祐子の左手の薬指にあるターコワイズの指輪が目にとまった。

「そうですか、それは残念です。でも、諦めます。まあ、その代わりに言っちゃあ何ですが、今夜は精一杯楽しみましょう」

「ごめんなさいね。今夜は、わたくしもちょっと酔いたい気分ですわ」

祐子は、金曜日に賢が来ることを橘に話してしまったことで、喜びが湧き上がってくるのを感じ、祝杯を挙げたいような気分になった。

ふたりはワインで乾杯した。やはり、適度な渋みがあり、その高級感は、あまり赤ワインを呑み慣れていない祐子にも、はっきり分った。口当たりがよく、コクもある。食事が運ばれて来たときには、祐子は少しいい気持ちになっていた。橘も少し酔いが回ってきていた。ふたりは食事をしながら、ワインを飲んだ。ステーキが半分ほど残っているのに、ボト

ルが空になった。橘は祐子に尋ねずに、もう一本同じワインを頼んだ。祐子は「あら、4万円よ、もう知らないから」と心の中で言ったが、酔いが回っていい気持ちになっている。ウエイトレスが注いでくれたワインを直ぐに口にした。食事が終える頃には、祐子の意識は朦朧としていた。橘はまだ、意識はしっかりしていたが、かなり酔っていた。橘が言った。

「祐子さん、実は・・・僕は4月から、あなたを守る為に福岡に来ることになったんです・・・明日は、その、その打ち合わせで、大学に・・・」  
祐子は橘の話が半分も理解できなかった。

「わたくし、悪い奴に狙われているの・・・本当に、悪い奴なんだから・・・とっても怖いのよ」

「僕が、守りますから、大丈夫ですよ・・・僕はあなたを守るために、高校教諭を辞めることにしたんです。でも、本望です」

「わたくしを・・・守ってください。・・・ありがとう・・・」  
橘はウエイトレスを呼んで、チェックを頼んだ。クレジットカードでの支払いが済むと、橘が言った。

「祐子さん、今日はありがとうございました。本当に楽しい夜でした」  
「ありがとう・・・わたし・・・」

橘が立ち上がっても、祐子は首を項垂れて、すわったままだった。

「祐子さん、大丈夫ですか?・・・」

祐子は頷くが立ち上がろうとしない。橘が祐子の右手を引いて立ち上がらせた。祐子はやっと立ち上がると、橘に身体を預けるように凭れ掛かった。橘は祐子を部屋まで連れて行くことにした。祐子のハンドバッグを左手で持つと、脇を抱えるようにして祐子を部屋の前まで連れて行った。

「祐子さん、鍵は何処にありますか?・・・祐子さん鍵は?」

「・・・・・・・・バッグの中・・・・・・・・」

かすかに聞こえるような声で祐子が応えた。橘は右手で祐子を抱き支えながら、左手だけで祐子のバッグを開けようとしたが、上手く開かない。

自分の酔っているのが分った。しっかりしなくてはと思い、バッグをドアに押し付けて何とか開けた。中に化粧道具や財布と一緒に賢の写真が入っていた。賢が祐子と二人で写っている写真だった。その横にカードの電子キーがある。橘は侘しい気持ちに襲われた。電子キーを翳すとロックが外れた。橘はキーを中に戻して、バッグの蓋を締めると、ドアのノブを引いた。祐子はまだ意識が朦朧としているようだった。祐子をベッドまで運び、ベッドに横たえようとした時、祐子がいきなり橘の首に抱きついた。

「あなた、帰っちゃ駄目、ねえ、・・・今夜はふたりきりなんだから、ねえ」

橘は夢の中にいるようだった。

「しかし・・・」

橘は、それでも先ほど目にした賢の写っている写真が目に浮かんだ。

「あなた、愛してる。ねえ、抱いて」

橘は我慢できなくなった。それから自分が何をしているのかも分らなかった。気が附いた時には二人は裸で抱き合っていた。祐子は橘の頭を抱き締めた。

「あなた、もっと強く抱いて・・・愛しているわ。・・・寂しかった。あなた、顔を見せて」

そう言いながら祐子は橘の頭を少し離してじっと見つめた。少しの間見つめていたが、はっとして、橘の身体を押しつけ、いきなり起き上がった。

「・・・た、橘さん・・・ど、どうして・・・」

「ゆうこさん・・・」

二人とも言葉を失った。祐子はベッドから滑り降りると辺りに脱ぎ散らしてある自分の下着とブラウスを急いで身に付けた。橘も直ぐに、下着を身に着けワイシャツと背広を着た。二人とも慌てて行動した。

「ど、どうして・・・橘さん・・・出て行ってください。は、早く出て行って・・・早く！」

まだ、震える手でネクタイを締めている橋に向かって祐子が言った。橋はネクタイを半分締めかけた状態で、慌てて部屋から出て行った。祐子は悲しかった。涙が止め処なく流れて出た。祐子は衣類を脱ぎ捨てるとバスルームに行きトイレのビデを使って洗浄した。何時までも何時までも洗浄を続けた。涙が止まらなかった。頭が割れるほど痛い。自分の吐く息がアルコール臭い。暫く洗浄してしてから、今度はシャワーを浴びた。ボディシャンプーをたっぷり掌にとって、体中にくまなく塗りつけてコックを一杯に回した。痛いほど身体にぶつかる湯の中で、祐子は身体を洗い続けた。髪も洗った。顔も、皮がむけるのではないかと思うほど徹底的に洗った。いくら洗っても、きれいになった感じがしなかった。祐子はシャワーの湯の中で声を出して泣き崩れた。暫らく泣いていたがやがて、シャワーのコックを閉めるとタオルで全身を拭った。きれいに拭おうとしたが、どうしても汚れが落ちないような気がした。

「わたしは、なんということをしてしまったんだろう。自分に誓った約束を破ってしまった。もう、あの人の目を見ることができない。あの人に捧げたわたくしの身体は、あのひとのものだけじゃなくなってしまった。いっそのこと死んでしまいたい」

祐子は心の中でそう繰り返した。下着を身に着け、バスローブを着ると、バスルームの入り口にある壁面全体の鏡に、自分を写してみた。立っていると、意識が朦朧としてきた。しかしそこに写っている姿は、何時もと何ら変わらない自分であった。また、涙が流れ出てきた。

「わたしは、なんて馬鹿だったんだろう」

頭の中で何度も、何度も同じ言葉を繰り返した。祐子はベッドのところに行って、ベッドカバーを剥ぎ取った。その上で橋に抱かれている自分の姿が目浮かぶようだった。祐子はうずく頭を振って、そのイメージを消そうとしたが、なかなか消えない。祐子はもう、このベッドの上で寝たくなかった。窓際のソファの上に横になった。時計は午前3時を回っていた。祐子は朝まで、悶々としていた。6時を過ぎると、頭痛は大分治まってきていた。支社に出勤する気になれない。しかし、そんな



無責任なことにはできない。自分の中で相矛盾する言葉が次から次に出てきては消えていった。

「わたしはどうかしてしまった。頭も狂っている」

そう考えている自分も、狂ってしまったのだろうかと思った。賢の言葉を思い出した。「思考は狂った猿だ」いや、賢が誰かの言葉を引用して言ったのだ。祐子は賢の言う「意識を生起した状態」に戻ろうと思った。

「自分の過ちを背負って生きよう」と思った。そう思うと、早く支社に出社して、仕事に打ち込みたかった。賢と逢う前に、自分の意識を元に戻したかった。それには仕事に打ち込むのが一番だと思った。しかし、食事をする気にはなれなかった。胃がむかむかしていた。支社は7時からセキュリティロックが外れる。ビルに入ることができると聞いている。祐子は身支度を整えると、ビジネスバッグを手にして部屋を出た。ホテルのロビーで祐子は香川に電話を入れた。香川はまだ起きたばかりだった。

直ぐにホテルに向かうから待っていてほしいと、香川は念を押す様言った。祐子は昨日少し呑み過ぎたので、気分を晴らす為に少し歩きたいと言った。香川はできるだけ急いで行くと言った。祐子は5分ほどロビーのソファに腰掛けて待っていたが、外気に当たって胸にくすぶっている気分をすっきりさせようと思ひ、支社に向かって歩き始めた。ホテルのエントランスを出ると強い風が吹いて来た。祐子はコートの襟を立てた。まだわずかに残っている頭痛も吹き跳ぶほどの強い風だった。祐子は身体を前に倒すようにして大通りに沿った歩道を歩いた。昨日の辛い記憶が蘇ってきた。また、一陣の突風が吹いた。祐子が身をこごめた時、何かが目の前に立ちふさがったと思った。その瞬間、祐子は身体を担ぎ上げられた。ほんの一瞬の出来事だった。抑えられた手から逃れようと祐子は必死に身体を動かした。誰かもう一人の者に持っていたビジネスバッグをもぎ取られた。必死にもがいたが、直ぐに誰かに脚を捕まれて動きを封じられた。祐子は自分が袋の中に入れられようとしていることを知った。祐子はできる限りの大声で叫んだ。

「やめて！……誰か！助けて一、誰かー！」

祐子の声は布を打つ風の音に吹き消されるように袋の中で空しく響いた。祐子は心の中で賢に助けを求めた。

「あなた！助けて一、あなた、わたくしを守って！」

誰かが車の扉を開けている。祐子は自分が頭の方から車の中に押し込められたのが分った。自分を担ぎ上げた者が一緒に乗って来て扉を閉めたようだ。袋に入れられたまま、何者かに身体を押さえつけられた状態で、車が急発進したのが分った。

「やめて一、やめてよ！誰？誰なのよ？」

誰も、一言も発しない。ただ誰かに体と脚を押さえつけられていることと、車でどこかに連れて行かれることだけは確かだった。暫らくして、祐子は抵抗するのを諦めた。しかし、急に息苦しくなってきた。

「苦しい！わたしを殺すつもりなの。息ができない。く、苦しい！」

祐子は、少し大げさに、さも苦しそうに叫んだ。

両足を押さえていた力が少し弱くなったと思ったとき、自分の口の周りの部分の布が、はさみで切り取られているのが分った。誰かが祐子の鼻の部分に穴を開けたようだ。それでも誰も一言も話さない。祐子は車の中には3人居ると感じた。自分を抑えている者、鞆を奪った者、そして車を運転している者だ。3人とも男のようだ。しかし、それも確かではなかった。鼻の近くに穴ができて、呼吸は苦しくなくなったが、脚を抑えている力は、拉致されたときほど強くはなくなったものの、依然として、祐子の動きを封じるのに十分だった。祐子は諦めた。そして、自分の軽率な行為が自分をこういう状況に追い込んでいるのだと思った。昨日の過ちには相応しい反動だと思い、そういうマイナスの思考を思ったことに対して、再び自省の念を起こした。何とかこの窮地から脱しなければと考えた。賢に対して、必死にテレパシーを送った。自分が拉致されたことを知らせようとした。

香川は祐子から連絡を受けると直ぐに顔を洗い、口を漱ぐと、急いで着

替えて、髭も剃らずに家を飛び出した。妻の由香里が心配そうに香川を送り出した。香川がホテルに着いたのは、祐子が拉致されたおよそ2分後だった。祐子の電話を受けたとき、香川は本能的に「あぶない」と感じた。だから、急いだ。それでもホテルまで7分が精一杯の時間だった。風の強い日である。祐子がホテルで待っていてくれることを祈った。エントランスの前に車を停めると、香川はホテルの中に駆け込んで行った。やはり祐子の姿は無かった。直ぐに車に引き返すと、支社に向けて発進した。支社までは5分も掛からない。香川は祐子がまだ支社に着いていないような気がした。しかし、支社までの歩道上に、祐子の姿は無かった。香川は一応、支社の出勤状況を調べた。やはり祐子は着いていなかった。始業1時間前である。緊急対応の男性2名しか出勤していないと、セキュリティサービスの担当者が言った。香川はもう一度ホテルに引き返してみた。フロントに祐子の不在を確認すると、今度は歩道周辺にも注意を向けながら急いで支社に向かった。しかしどこにも祐子の姿は無かった。

賢は昨日祐子にメールを送った後、愛子が寝入ってから祐子に電話を掛けた。呼び出し音は鳴っていたが、祐子が出なかった。賢は少し気に掛かった。しかし、その時は胸を締め付けるような戦慄は感じなかった。2度電話したが、通じなかった。賢は多分祐子は疲れて寝ているのだろうと思った。意識を覚醒したまま賢は床に着いた、愛子はかすかな寝息を立てている。賢の意識に急に祐子が近くに居て、自分に抱きついてきたような感覚がした。賢も祐子を抱いている意識に陥った。そのまま眠りに落ちたが、3時頃、激しい悲しみと感情の嵐が自分に向けられてきているのを感じた。賢は知らない内に自分の両頬が濡れているのを感じた。魂が悲しみに打ち震えるような感覚だった。それから朝までの間、意識は定まらなかったが、それでも賢は眠りの中にいた。激しい戦慄に襲われたのは、朝愛子の声で目が覚めたときだった。胸が締め付けられるようだった。昨日の朝と同じような戦慄を覚えた。賢は直感的に祐子

に何か異変が起きたと思った。意識を集中して祐子の周りにバリアを張った場面をイメージ化した。守護霊と指導霊に祐子を守るように祈った。賢は気が気でなかった。愛子の美味しい味噌汁の味も上の空で、気付いたときには朝食が終えていた。愛子にもそんな賢の感情の動きが見て取れた。

「賢パパ、どうかしたの？今日はなんか可笑しいよ」

「うん、ちょっと、心配事があってな。大丈夫だ、心配するな。それより愛子、今日の予定は？いつもの通りか？」

「うん、いつもの通りよ」

賢は朝食を済ませ、身支度を整えると、一旦寝室に入って祐子に電話を掛けた。昨夜と同じように呼び出し音は鳴るが、祐子は出ない。3度掛けたが同じだった。賢は香川に電話してみようと思った。祐子が頼りにしている男性だ。香川の存在をこれほど有り難いと思ったことは無かった。

「iプロジェクトの内観賢ですが、朝早くから申し訳ないのですが、香川さんに一寸お尋ねしたいことがありますて……」

「プロジェクトリーダーの内観さんですか？」

「はい、そうです。内観です」

「九州担当の香川です。よろしく申し上げます。何か緊急のことでしょうか？」

「東京から月曜日にそちらに勤務することになった社長令嬢の藤代祐子さんと連絡を取りたいのですが、どちらにいかご存知ありませんか？ホテルには居ないようなのですが……」

「はい、それが、お嬢様は今朝、ホテルから支社に向かう途中で行方が分からなくなってしまったのです。跡形も無く居なくなられてしまいました。我々も今、必死になって可能性のあるところを探しているところです」

「本当ですか？それで、警察には捜索願いを出しましたか？」

「はい、電話でですが緊急ということでお願いしました。また、詳しい

ことが分りましたら、ご連絡いたします」

賢は全身から一斉に血が引いてゆくような感覚に陥った。

祐子の失踪は午前中に関係者に伝わり、全員に大きな衝撃を与えた。亜希子は泣き崩れた。数馬は茫然自失し、言葉を発することができなかった。亮子も涙を流した。藤代肇は自分の決断で、祐子をこんな目にあわせたことに対して、自責の念に駆られているようだった。祐子の知人に会うたびに詫びていた。登紀子も声を出して泣いた。亜希子の失踪の時と違い、祐子には失踪はあり得ないと誰しも思っていた。しかし、それが突然起きたことで、明らかに祐子の身に危険が迫っていることを全員が予感した。賢は直ぐにフライトの予約を入れた。午後1番の便を確保できた。空港に行くまでの間、知っている限り、祐子の知人全員に連絡を入れた。連絡するたびに祐子の安全を祈ってもらうように頼んだ。その多くが、言葉を発することができず、電話口で泣き出したりした。以前勤めていた会社、孤児院、養護施設、ボランティアグループ、ゆき、早苗、原の順に連絡していった。最後に原に知らせたとき原が言った。「内観さん、暫らくの間、プロジェクトのことを離れて、徹底的に探した方がいいですよ。祐子さんの存在は他の何にも代え難いですから。留守の間、僕が愛子さんのことをケアします」

賢は原の言葉が嬉しかった。直ぐに会社に電話を掛けた。藤代肇は既に九州支社内に緊急体制を敷くよう指示していた。九州支社は鷺沼が中心となって、搜索を開始したと言った。本社の総務、法務、資材の各部門に競合への警戒を強めるように指示した。賢からの電話に、藤代は「済まない。祐子を九州にやることについて、事前に君に相談すればよかった」と言った。賢は、何も応えることができなかった。続いて賢は楠木と田辺に電話を入れた。既に始業時間を過ぎていたので、賢が連絡も入れずに入社してないことを、楠木は心配していた。

「リーダー、何かあったのですか？」

「社長の娘さんの藤代祐子さんが失踪した。犯罪に巻き込まれた可能性がある。僕は直ぐに福岡に飛ぶから、今日から暫らく、楠木さんがプロ

ジェクトの舵取りをしてもらえないかな？」

「分かりました。でも、一体何が起きたんでしょうか？」

「僕にも分らないんです。兎に角、現地に行って調べます。もう、予算化アイテムのブレークダウンは終わったから、暫らくは力仕事でしょう。概略仕様への落とし込みを順次進めてもらえませんか？」

「分かりました。関係部門とわたしの部下を使って、精力的に進めます」  
賢は田辺にも電話を掛けた。

「リーダー、わたくしも同行致します。午後一のフライトですね」

「田辺さん、仕事の方は大丈夫か？」

「はい、わたくしの方も一区切りついていますから、大丈夫です。それに、リーダーの女房役ですから、リーダーが緊急で出られるときは必ず同行させていただきます」

「そうか、それは有り難い。今度の失踪がプロジェクトと直接関係なければいいが、もし、競合のやったことだとすると、何を狙ったものか突き止めなくてはならないしな。1週間くらいは滞在する覚悟だ」

「はい、わたくしもそう思っています。これから自宅に戻って準備します」

「じゃ、出発の30分前に空港で落ち合おう」

亜希子は電話口で泣いた。亜希子も登紀子と一緒に賢に同行すると言った。電話を切ると、亜希子たちもその場で賢と同じフライトを確保した。亜希子は自分の部屋に戻ると、直ぐに目覚まし時計を20分後にセットし、それをベッドから最も離れた窓際の飾り棚の上に置いた。ガウンのベルトを使って自分の左脚をベッド括り付けてから、ベッドに腰掛けて瞑想状態に入った。祐子をイメージし、その行き先の透視を試みた……何も見えない。真っ暗闇だった。しかし、そのうち微かな振動音が感じられるようになってきた。不意に何か、大きな塊がゆれたように見えた。薄暗い中に大きな包み、いや袋のような物が見える。人がいる。3人いた。3人ともほとんど動いていない。大きな袋が時々動いては、また暫

らく動かなくなる。振動音がする。何か車の中のように感じられる。大きな袋は悲しみに一杯になっているように思えた。それから直ぐにビジョンが変わり、3人と袋を乗せた車が道路を走っているのが見えた。ずっと同じ状態のままで走り続けている。……亜希子は目覚まし時計の音で瞑想から覚めた。

「祐子お姉様は誘拐されてしまわれた！」

亜希子は直ぐに賢に電話を掛けた。賢は電話を受けると直ぐに、福岡支社の香川に連絡を入れた。香川以外の者には通じない話だと考えた。

賢たちは3時10分に福岡空港に着いた。賢と田辺はそのまま支社に向かった。亜希子と登紀子は一旦ホテルにチェックインしてから、福岡県警に行くことにした。登紀子は執事に捜索願を作成させ、それを持参していた。賢は飛行機に搭乗するまで15分置きに祐子の携帯に電話を掛け続けた。祐子は出なかった。「電源が切られているか電話の届かないところにある」というメッセージが返ってくる。飛行機を降りて直ぐにもう一度電話してみた、やはり同じメッセージが繰り返されていた。呼び出し音が鳴らなくなったのは今朝8時頃からだ。賢は、もしかすると携帯が既に使えなくなってしまったのかも知れないと思った。空港からのタクシーの中で田辺が言った。

「リーダー、藤代祐子さんは新たに携帯を購入されたとおっしゃいましたね。もしかしたら、SNSを設定しているかもしれませんね。リーダーに連絡がきていませんか？」

賢はSNS機能について知らなかった。祐子からのメールを確認すると果たして、携帯を買ったばかりのときに送ってきたメールにそのことが書いてあった。賢は田辺に、追跡できる契約をしているようだと言った。田辺は祐子の携帯の番号と携帯電話の会社名を確認してから、携帯のWEBの位置確認サービスのサイトから、位置確認を行った。

「リーダー、現在位置不明と出ています。多分電源を切ってしまったんじゃないでしょうか。継続監視のオプションを設定しました。位置確認ができれば、わたくしの電話にメールが届きます」

賢は田辺の機知に心で感謝した。

「ありがとう。実は、田辺さん、非現実的と思うかもしれないが、今朝藤代亜希子さんが、祐子さんが袋に入れられて自動車連れ去られているところを透視で確認したんだ。袋は確認できたけど、中に祐子さんがいるかどうかまでは確認できなかったようだが」

田辺は「やはり、そうですか」と言ったが、それほど驚いた様子も見せなかった。

福岡に附いてからも、賢が何度電話しても、「電源が切れているか電波の届かないところにある」という応答が返ってくるだけである。支社に着くと、賢と田辺は支社長の驚沼を訪れた。ふたりは支社長室の隣の応接室に通された。驚沼は直ぐに香川を呼んだ。香川と総務部長が入って来て、空いている椅子に座った。驚沼は賢に祐子が失踪するまでの経過を説明した。

「わたしは、あのハイパートレードの社長小山田が怪しいと思ったんですが、彼は昨日の内に佐世保の本社に戻っていたんです。ハイパートレードの支社に問い合わせたのですが、月曜日に一緒にいたふみよと呼ばれていた秘書は今日から休暇を取って、ヨーロッパに旅行に出掛けているとのこと。ふみよというのは名前じゃなくて苗字なんです。他の社員は何も知らないようでした。祐子さんの名前さえ知りませんでした。そこで、千恵子という秘書を呼び出そうとしたのですが、そういう秘書はいないとのことでした。どうやら、小山田社長が個人的に雇っていたんじゃないかと思います。香川が少し俯き加減で話し始めた。

「僕が悪いんです。お嬢様が歩きたいとおっしゃったとき、何としてでも、お止めすればよかったんです。危ないと思っていたのに、お嬢様をお守りすることができなくて、僕は東領の社員として失格です……」驚沼が言った。

「責任は香川にはありません。香川は精一杯やってくれていました。総ての責任はわたしにあります。社長のお嬢様をお預かりしていながら、お嬢様を危険な目に遭わせてしまい、失踪という結果的になってしまっ



たのですから、わたしは責任を取るつもりです」

賢が言った。

「鷺沼さん、今はそういうことより、藤代祐子さんがどこに連れて行かれたのか、無事なのかどうかを確認する方法を検討しましょう」

賢は亜希子が透視した話はしなかった。田辺も口を挟まなかった。

「そうですね。失礼しました・・・僕は、やはりあのハイパートレード社の小山田社長のことが引っ掛かります。祐子さんに対して、かなり執拗に接近しようとしていましたから・・・まあ考え過ぎかも知れませんが、どうしても誰か、そういった関係の組織に頼んで、誘拐を凶ったんじゃないか、なんて考えちゃうんです。あまり、想像で話すのはまずいでしょうが・・・」

「そのほか、祐子さんについて、気になることはありませんでしたか？」

賢が尋ねると、香川が応えた。

「そう言えば、昨日、祐子さんは友達が福岡に出張で来ているって言っていました」

賢は橘のことを思い出した。昨日のメールで祐子が橘と夕食を共にすると言っていたことを思い出した。朝、香川と連絡をとっているという事実から、昨晚のことにまで考えが及ばなかった。賢は橘がこういう類の事件に関与しているとは到底考えられなかった。しかし、彼が賢の知らない何らかの情報を持っている可能性は否めないと思った。

「香川さん、僕は後でその友人にコンタクトしてみます。しかし、今朝までは彼女は元気でいたわけですから、昨夜の夕食が原因とは・・・」

香川も同意した。

「ええ、そう思います。全く別の原因だと思います。兎に角、僕は警察に行って、もう一度捜査の要請をして来ます」

それまで黙って話を聴いていた総務部長が言った。

「わたくしも香川課長と一緒に警察に行きます」

香川と総務部長が出てゆくと、賢も鷺沼に挨拶して席を立った。田辺も賢の後に付いて応接室を出た。エレベータを待っているとき、田辺が言

った。

「リーダー、わたくしは女だからかもしれませんが、何となく昨日の夕食の時か、その後で何かあったんじゃないかという気がするんです。今朝の藤代さんは精神的に不安定だった様に思えるんです。いくら呑み過ぎたと言っても、まだ寒いのに折角迎えに来てくれることになっている香川課長を待たずに一人で歩くなんて、やはり、何か引っ掛かります」賢が下唇を噛んでから応えた。

「僕も同じことを考えていたんだ。橘さんに・・・その友人というのは橘さんという高校の教諭なんだけど、先ず、彼に連絡を取ってみよう」賢はどうやって橘に連絡を取ろうかと考えを巡らせた。番号案内で電話番号を調べ、橘の勤めている鹿児島の高校に電話してみた。教頭は橘が全国高校生物教諭連絡会に出席する為、一昨日の夕方から福岡のビジネスホテルに滞在していると言った。賢はビジネスホテルの電話番号を確認して、直ぐに電話を掛けた。橘は不在だった。しかし幸いなことにまだチェックアウトはしてなかった。賢と田辺は橘とのコンタクトはホテルにチェックインしてから行うことにして、その前に福岡県警に寄ってみる事にした。受付に預けておいたスーツケースを受け取るとふたりはタクシーで県警に向かった。県警の受付で祐子の失踪の件について相談したいと言うと、直ぐに捜査第3課に行くように言われた。2階の捜査第3課に行くと会議室に通された。そこには既に香川、総務部長の柳川、それと藤代登紀子が居て、方形に並べた机の周りに座り、奥の席にいる4名の警察官と話し合っていた。奥の机の左横にはライティングボードがあり、そこに祐子の失踪の経過が箇条書きで書き込まれている。香川たちが賢に向かって軽く頭を下げた。奥の机の中央にいる最年長の警察官がふたりに席に座るように促してから、賢に向かって言った。

「失礼ですが、どなたでしょうか？被害者とはどういうご関係で？」賢が応えた。

「はい、我々は東領製作所の者です。わたくしは内観賢、こちらは田辺梓と申します。また、わたくしは被害者の友人でもあります。既にご存

知のことと思いますが、わたくしが鹿児島で失踪したとき、わたくしを救い出してくれたのが藤代祐子さんと、そこにおいで藤代登紀子さんです」

登紀子は軽く頷いた。4人の警察官は確認でもするかのように顔を見合わせた。

「そうですか？今、ここにおられる3名の方から藤代祐子さんが失踪される前後の行動について伺っていたところですが、このホワイトボードに書いてある事実以外に、何か変わったことはありませんでしたか？」賢は入室した時、ほとんど一瞬でライティングボードの内容を把握していたので、直ぐに応えた。

「昨日友人に会って夕食を共にしたと記載されていますが、その友人とは鹿児島単人高校の生物担当の橘教諭です。彼は今、福岡クリスタルビジネスホテルに滞在しています」

その一瞬の応答に香川と柳川は驚いた。4名の警察官も目を見張った。一番端に座っている警察官が訊いた。

「どうしてご存知なんですか？」

「彼は僕の友人でもあります。先ほど高校に問い合わせして、宿泊場所を確認しました。今は外に出ているようです。夕方、コンタクトを取るつもりです」

立っている警察官が言った。

「今のところ、考えられるシナリオは5つです。一つ目は通り魔的な誘拐、二つ目はビジネス上の軋轢から来る拉致、3つ目は友人関係の拗れなどから来る拉致、4つ目は男女関係の拗れなどから来る誘拐、5つ目は自分の意思による失踪。この中のどの線が一番疑われると考えますか？それを参考にして捜査の優先順位を決めさせて貰います。これ以外に別の原因が考えられれば、それも説明して頂けますか？」

賢は応えた。祐子との関係が暴露されても言うべきだと思った。

「5番目は無いと思います。それと、彼女は新しい携帯を持っていました。わたくしがコンタクトを取ろうとしましたが、昨夜から繋がりませ

んでした。昨夜から今朝に掛けては呼び出し音が鳴っても出ない状態でしたが、今朝、確か、8時過ぎには「電源が切られているか、電波の届かないところにある」というメッセージが帰ってくるようになりました。僕個人としては、誰かに拉致されたと考えるしかないと思います」立っている警察官が賢の言葉を要約して空いている場所に書き込んだ。これまで黙っていた、50歳前後と思われる一見大人しそうな警察官が言った。

「連絡を取ってお話を伺いたい人たちですが、先ずハイパートレード社の小山田社長、それに踏世(ふみよ)さんという小山田社長の女性秘書、それから千恵子と呼ばれていたもう一人の小山田社長の秘書と思しき女性、それから友人の橘先生、それ位ですかね。今のところ、千恵子さんと呼ばれていた女性以外は、所在がはっきりしています。勿論東領製作所の方々には何度かお話させて頂きたいと思いますが。我々は既にハイパートレード社の小山田社長に対する、捜査令状を取りました。先ほど佐賀県警の佐世保署に小山田社長の捜査依頼をしました」それに続いて、立っている警察官が言った。

「失踪前日の朝、小山田社長が被害者を強引に自分の車に乗せようとする不審な行動に出ていますが、香川さんのお話では、その時小山田社長の車は別の男が運転していて、それ以外にもう一人男が同乗していたということです。この証言に基づいて、我々としては先ず小山田社長を取り調べるべく捜査を開始しています」

福岡県警を出ると賢、田辺、藤代登紀子の3人はタクシーでJR福岡駅前のクノッソスホテルに向かった。祐子が宿泊していたホテルだ。田辺はスーツケースを軽々と操っている。いかにも出張し慣れた様子が伺える。賢はそんな田辺の姿を見て、やはりビジネスウーマンだと思った。3人がエントランスを入ると亜希子が駆け寄って来た。

「どうでしたか？祐子お姉さまは見つかりましたか？」

亜希子は賢に向かって聞いた。

「亜希子さん、チェックインは済んだの？」

「はい、おかあさま・・・どうだったのですか？祐子お姉さまは、大丈夫でしょうか？」

亜希子の目が充血しているのを見て、賢も涙ぐんだ。

「まだ、分らない」

「橘さんがずっとお待ちです。あの向こうにおられます」

亜希子が指差すと、ロビーの一番奥のソファに一人の男性が頭を項垂れて座っている。驚くと同時に賢の胸にある種の安堵感が込み上げてきた。田辺と登紀子も驚きの色を隠せなかった。賢は亜希子に頷くと直ぐに橘の近くに歩いて行った。3人も賢の後を1メートルほど間を空けて附いて行った。賢が橘の横に立つと橘が顔を少し上げたが、顔色は青ざめ、空ろな目をしている。賢は橘の方に身を屈（こご）めて呼び掛けた。

「橘さん、」

賢の言葉を遮るように橘が言った。

「申し訳ありませんでした」

橘は立ち上がろうともせず、がっくりと肩を落として、頭を低く下げた。橘は下を向いたまま唇をかみ締めている。賢は橘も悲嘆にくれているんだと思った。

「橘さん、何か心当たりはありませんか？昨夜の祐子さんの様子を詳しく教えて頂けませんか？」

「・・・はい・・・あなたとだけお話したいのですが・・・」

原智明語録と所長のことが賢の頭を過（よぎ）った。何か他のものに隠しておきたいことがあるに違いないと思った。

「分かりました。それでは、わたくしたちは先ずチェックインを済ませますから、それから僕の部屋に行きましょう」

橘は頷いた。賢と田辺はスーツケースを引いてチェックイン・カウンターに向かった。登紀子のチェックインは亜希子が既に済ませていた。

賢の部屋は4階のエレベータの隣だった。部屋に入ると賢はスーツケースをベッドサイドに置いたまま橘を、窓際にある2つのカウチの一方に座るように促して、自分も橘に向かい合って座った。

「橘さん、そんなに落胆なさないでください。あなたの責任じゃありません」

橘は椅子から降りて、絨毯の上に土下座した。

「申し訳ありませんでした。僕は何とお詫びしていいか分かりません」  
賢も立ち上がり、土下座している橘の右手を取って引き上げながら言った。

「あなたの所為じゃないんですから・・・それより、昨日の祐子さんのことを教えて頂きたいのです。携帯電話も昨夜（ゆうべ）からずっと通じなかったんです」

橘は土下座したまま項垂れて言った。

「いいえ、ぼくはとんでもない過ちを犯してしまったのです・・・ぼ、ぼくは・・・」

橘の涙が絨毯の上に零れ落ちた。賢はおおよそのことを察した。昨日、祐子のイメージが自分の横に顕現し、自分が祐子を抱いている意識になったことを思い出した。

「僕は、泥酔していた祐子さんを抱いてしまったんです・・・本当に申し訳ありませんでした・・・」

賢の心は乱れなかった。祐子が正気で橘に抱かれるはずは無いことを知っている。ふたりの泥酔状態での過ちだと思った。

「僕は、どんな償いでもします。僕をお許しただけないことは分かっております・・・ああ、僕はなんと卑劣な男なんでしょう・・・あなたと祐子さんの仲を知っていながら、あなた方のような純粋な方たちを・・・」

暫らく黙っていた賢が、静かに話した。

「橘さん、もう、済んでしまったことは忘れてください。あなたの過ちで僕の心が乱されることはありません。あなたは祐子に許しを請うてください。僕に対しては謝る必要はありません。それより、自分の過ちに気付いた後の祐子の心の動きが心配です」

賢は祐子をさん付けで呼ぶのを止めた。賢は力を込めて橘を立ち上ら

せると、カウチに腰掛けさせた。

「それに気付いたとき、祐子はどんな態度を取りましたか？」

「わたくしに直ぐに出てゆくように言いました。それも強い言葉で。当然だと思います・・・僕もその時、自分の犯した過ちの重大さに気付きました」

橘はガラス天板を張った金属製のテーブルの上に視線を固定したまま、顔を上げずに言った。賢の顔を見ることができなかった。賢はアルコールをどの程度飲んだのか、祐子は機嫌が良かったか、部屋に入ったとき意識はあったのか、気付いたのはいつかなどと、祐子のことを尋ねた。橘自身も、どんな風に祐子を抱いたのか記憶に無いことが分った。賢は祐子が抱かれた相手は橘ではなかったと思った。賢には、過ちに気付いた後の祐子の心の動きが分った。賢はこれ以上引き止めては橘が苦しむだけだと思い、このことは絶対誰にも話さないように口止めしてから、礼を言って引き取ってもらうことにした。流石にロビーまで送る気にはなれなかった。橘が立ち去ると賢は自分の意識に絡みついた橘の悔恨と自己嫌悪の想念を振り払うようにシャワーを浴び、衣服を下着まで総て着替えた。賢は亜希子の部屋に電話を掛けた。亜希子は電話を待っていた。直ぐに賢の部屋に来ると言った。少しして亜希子がドアをノックした。賢は亜希子にもう一度透視をしてもらいたいと言った。亜希子はそのつもりで来ていた。亜希子はいろいろな方法を試みたが、どうしても祐子に関する透視ができなかった。祐子が観えないと言った。賢は不安に襲われた。亜希子に一旦部屋に戻るように言った。亜希子が出てゆくと、賢はロビーフロアに降り祐子の部屋を見せて貰うことをフロントに掛け合った。フロントの担当者はそれを拒否した。警察以外の人にはたとえ身内の人にも、許可する訳にはいかないと応えた。賢がフロントの男と掛け合っているとき、エントランスから警察官が入って来た。先ほどの検討会に出席していた50歳くらいの警察官と若い警察官の二人だった。二人はフロントまで来ると賢に向かって軽く頭を下げた。賢も同時に頭を下げた。

「さきほどの内観さんですね。こちらにお泊りですか？」

「はい」

「少し、被害者の泊まっていた部屋に何か手掛かりになるものが無いかわ調べようと思ひまして」

「すみません、わたくしも立ち合わせて頂けませんでしょうか？彼女とは親しい友人の間柄ですので、少しはお役に立てるかもしれませんし」

「分かりました。しかし、遺留品には直接手を触れないで頂けますか？」

「はい、分かりました」

祐子の部屋は既にベッドメイキングが終わっていて、タオル類も新しいものに交換されていた。賢は、遅かったと思った。警察官はチェストの引き出しを開けてみた。衣類がきちんと整理されて収められている。特に変わったところは無かった。スーツケースの中もきちんと整理されていて、異常は見出せなかった。若い方の警察官が祐子のオレンジ色のワンピースと下着類が入れられているランドリー袋をクローゼットの中から取り出して来た。後で鑑識に回すと言った。賢はそのワンピースが祐子のものであることを告げた。ベッドの周りを廻っていた賢がチェストの上のライトスタンドの横にあるメモ用紙に何か書き殴られているのに気付いた。

「あなた、ごめんなさい。わたしは、死んでしまいたい。もう、あなたに会えない」

確かに祐子の筆跡だが、文字は乱れていて普段のなめらかな祐子の字ではなかった。明らかに祐子の心の乱れを感じた。賢は悲しくなった。祐子が哀れだった。どれほど苦しんだことだろうと思うと、目頭が熱くなった。

「内観さん、それは何ですか？被害者が書いたものですかね？」

「はい、そのようです」

年長の方の警察官がメモを黙読しながら言った。

「なにになに・・・ちょっと、尋常じゃないですね。やはり、昨夜何かあったんでしょうかね。このあなたって誰ですかね」



「多分、僕のことでしょう。僕たちは仲のよい友達でしたから。先ほど、昨夜藤代祐子さんが一緒に夕食をした橘さんに会いました。彼は僕に会いにこのホテルに来ました。彼の話では、昨夜はかなり酒に酔っていたようです。彼女を深酔いさせてしまった責任を感じて、落胆していました」

「そうですか、あなたは被害者の恋人ですか？」

「はい、そう言ってもいいかもしれませんが。かなり仲のよい間柄でした」その時、田辺から賢の携帯に電話が掛かった。賢は警察官に「一寸失礼します」と言って電話に出た。

「リーダー、さっきWEBを確認してみたんです。そしたら、10時半頃、ほんの5分程度場所確認が出来た時間帯があったことが分りました10分以上継続確認できないと、メールは発信されないようです。ですから、藤代祐子さんの携帯がそのころ佐世保市内にあったということのようです。このシステムはまだ完全じゃないですね。短時間の検出ではメール発信しないようですから」

賢は田辺に礼を言った。

「ほ、本当ですか？よく調べてくれました。ありがとうございます。それで場所は何処ですか？」

「はい、佐世保市内のようです。今から詳細の場所を言います。メモしてください。長崎県佐世保市……」

「そんな所に行っているんですか？佐世保といえばハイパー・トレード社の本社のあるところですね。やはり……後でこちらから連絡します。一寸待っててください」

電話を切ると、賢は書き取ったメモを渡ししながら、田辺からの電話の内容を年長の方の警察官に説明した。

「やはり、そうでしたか。直ぐに佐世保署と連絡を取ります。でも、携帯は今もそこにあるかどうかは分かりませんね。梶原くん、一寸本署に連絡を入れて、佐世保署に「午前10時半頃この場所に被害者の携帯があった形跡がある」ということを伝えるように言ってくれ」

年長の警察官はメモを若い警察官に渡して言った。

「はい、直ぐ連絡します」

年長の警察官が賢に言った。

「いずれにしても、早く佐世保を調べた方がよさそうですね。それで、橘さんは今何処に？」

「もう、自分のホテルに帰りました」

「何か言っていないませんでしたか？」

「はい、昨夜は深酒をして、二人は喧嘩したようです。彼女は別れ際に彼に対して、かなり酷いことを言ったようです。多分、彼を傷つけたことを悔んだ言葉じゃないかと思います。僕は橘さんとは仲のいい友達ですから、その友人を傷つけたと自己嫌悪に陥っていたんだと思います。彼女はかなり酔っていて、感傷的になっていたんじゃないかと思います」

「そうですか。また、後で橘さんにも話を伺ってみます」

賢は橘が、昨夜の祐子との出来事を詳細に証言することは無いと確信していた。警察官が帰ると、賢は亜希子と田辺の部屋に電話を掛けた。一緒に食事をしながら相談することにした。登紀子には亜希子から伝えるように頼んだ。3人は賢からの電話を待っていた。橘との話の内容を知りたかった。祐子の消息について何らかの手掛かりが得られることを期待していた。賢がレストランに入ると3人が既に席に着いていた。他には誰も客が居なかった。4時50分という時間は夕食には早すぎる時間だった。4人とも軽い食事を望んだ。一番早く出来る食事をウエイトレスに聞き、サンドウィッチを頼んだ。閉じたメニューをウエイトレスに返しながらか登紀子が賢に向かって話し掛けた。

「内観さん、橘さんとの話はどうでしたか？祐子のこと何か分りましたか？」

「いいえ、特に・・・」

「先ほど、田辺さんから、祐子お姉様の携帯が午前10時半頃佐世保市内にあったことが確認できたとうかがいました」

亜希子が賢の返事を遮るように言うと、登喜子がそれに続けた。

「皆で直ぐに佐世保に行ったほうがいいですね」

「ええ、でも、追跡は警察に任せておいて、僕たちでなければならないことをしたほうがいいと思います」

「橘さんから、何か新しい情報は得られなかったのですか？」

登紀子が念を押すように訊いた。

「いいえ、直接の手掛かりになるような新しい事実はありませんでした。ただ失踪の前の日の食事中に、ワインを呑み過ぎたようで、ふたりとも酩酊してしまっただけです。食事の後で、どうもふたりが喧嘩したようで、ふたりともそれを悔やんでいたようです。少なくとも橘さんは後悔していました。祐子さんが失踪してしまったことで、そのショックがすごく大きいようでした。それと、祐子さんは前日のアルコールが残っていたこともあって、気分を切り替えようとして、少し歩きたかったようです。それより、問題はその前日から祐子さんが狙われていたんじゃないかと思われることです。警察もその辺を疑っているようです。先ほど警察での検討会で、警察官が話していたように、前の日の朝、ハイパートレード社の社長が祐子さんを無理に車に乗せようとしたんですが、その時、社長以外に二人の男が車に乗っていたとのことで、犯罪の匂いが濃くなってきたように思います」

登紀子は言った。

「犯罪ですか？」

「分りませんが、今は祐子さんが無事でいてくれるように、全身全霊で祈り続けるしかないと思います。僕は田辺さんと一緒に支社の中から、捜査の手掛かりになるような証拠を探し出そうと思います」

「明日の朝、主人もこちらに来ます。わたくしたちが居ても捜査の役に立つかどうか疑問ですが、ただ、じっとしていられなくて……祐子は可愛そうな子です。赤ん坊の時に両親を亡くし、叔父の元で愛情も無く育てられて……折角わたくしたちの娘になれたと思ったら、今度は拉致されるなんて……」

そう言いながら登紀子はハンカチで涙を拭った。亜希子も赤い目に涙を

一杯貯めて言った。

「あなた、祐子お姉さまを助けてください。あなたならできるはずですよ。いいえ、きっとできます」

賢は言った。

「僕は、祐子さんの周りに意識でバリアを張っている。祐子さんが九州に来たときからずっと意識の奥で、祐子さんを守り通している。だから、絶対、命に別状は無いはずだ。祐子さんは亜希子さんのようにテレパシーも使えなければ、時空間を切り替えることもできない。だけど、少なくとも僕と祐子さんとはお互いの意識の交流ができることを知っている。それを使うしか、今は方法が無い」

田辺には賢のその言葉が唯の希望のように何となく頼りなく聞こえた。

「リーダー、意識の作用で守ることは分りましたが、もっと現実的な手段での解決も急がないと、危険だと思います」

「勿論、それはそれで、全力でやるつもりだ。今日、これから夜行のバスで佐世保に行くつもりだ。田辺さんは明日の午前中支社で祐子さんのPCのデータやメールの痕跡、電話の記録なんかを調べてから、僕を追って佐世保に来てくれないか」

田辺が言った。

「リーダー、分りました。わたくしも今の計画に賛成です。一番疑わしいところに当たってみた方がいいと思います。多分警察も動いているでしょうが、リーダーにしかできないことがあるような気がします」

賢もそうだと思った。田辺に翌日のことを頼むと、席を立ててレストランから出て行き、フロントに今夜の高速バスの予約を入れて直ぐに戻って来た。7時に出発することになった。食事が済むと4人は早々に引き上げた。賢が一旦部屋に戻ると、ドアをノックする音がした。亜希子だった。賢の部屋に入ると亜希子は言った。

「あなた、わたくし、もう一度透視に挑戦してみます。あなたに近くにいらしていただかないと、危険だと思うのでこちらに参りました」

ふたりは、直ぐに瞑想に入る準備をした。暫らくの間呼吸を整え、無心

になる瞑想を行った。やがて、心が静まると、賢は亜希子の左手を握り、言った。

「さあ、今祐子がどこに居るか、どうしているか覗いてみてくれ……」  
亜希子は暫らく、何も言わずに瞑目していたが、やがてポツリポツリと話し始めた。

「どこか、部屋の中が見えます。何人かの人が居ます。そうです、全部で5人います。祐子お姉さまもいらっしゃるようです。祐子お姉さまは……椅子に座っています。誰か一人のひとが祐子お姉さまに向かって何か言っています。何かは分かりません……」

亜希子が涙を流し、体が揺れ始めたので、賢が声を掛けた。

「亜希子さん、瞑想を解いてください。意識をはっきりさせてください。僕が3つ数えますから、1、2、3で意識をはっきりします。1、2、3はい、はっきりしました」

亜希子は涙を拭いながら言った。

「あなた、あの部屋の中に祐子お姉さまがいらっしゃるようです」

「やはり、拉致されていたのか……」

袋の中に閉じ込められた祐子を載せた車は、ひたすら走り続けた。拉致されてから1時間あまり、思考が狂った猿のごとく、いろいろな考えを引っ張り出してきては、祐子を悩ませた。その狂った思考もどうやら種が尽きたようで、同じことの繰り返しになってきた。祐子は安定した走行の状態から、車が高速道路を走っているようだと思った。既に、祐子は覚悟を決めていた。橋に辱められた自分の身を、賢は勿論のこと友人たちにも、新たに出来た家族にも誰にも見せたくなかった。自分のそういう意識が、この現実を引き寄せているのだと思い、それならいっそのこと、この先どうなるか見極めてやろうという開き直った気持ちになっていた。祐子は無性に小用を足したくなった。

「トイレに行きたいわ。今度のサービスエリアで停めて」

男の低い声で返事があった。それが、祐子が拉致されてから聞く初めて

の声だった。

「分った、一寸待ってろ！」

暫らくそのまま走ると、車が減速したのが感じられ、続いてゆっくり旋回し始めた。どうやら何処かのインターチェンジを降りたようだ。微妙ではあったが、祐子の耳に料金の支払いを受けた料金係が「はいおつり、ありがとうございます」と言っている声が聞こえた。それから少し走ると、発進、停止を繰り返し、左右に揺れて、今度はでこぼこ道を走っているような振動が暫らく続いた。やがて車が急に停まった。

「ここでしろ」

脚を抑えていたのはやはり男だった。袋が取り除かれ、祐子は拘束から開放された。逆に3人の男たちが黒い毛糸の帽子を頭にすっぽり被っている。運転席にいた男が車から降りて、祐子の乗せられている後部座席のドアを開けながら言った。

「はやくしろ！」

男が3人とも車から降りて、その内の二人が祐子の両手を抑えるように掴んで車から引き降ろした。どうやら、そこは山の中のようだった。

「そこの草むらでしろ・・・はやくしろ！」

男たちは祐子を取り囲んでいる。祐子は、意識を賢に向けた。「あなた、わたしを守っていて、わたしはもう何も恐れない」そう心の中で叫ぶと、その場でいきなりスカートを捲り、下着を引き降ろしてしゃがみ込んだ。そして目を瞑り一気に放尿した。放尿が澄むと、意外と清々しい気分になった。祐子は目を瞑ったまま、下着を上げ、スカートを元に戻した。運転している男と祐子の左に乗っていた男が「へっへっへっへ」と下品な笑い声を上げた。祐子は「ありがとう」と言った。男たちは祐子の声で、笑うのを止めた。

「乗れ！」

先ほど右側に乗っていた男の低い声で、祐子は自分から車に乗り込んだ。拉致されているにも拘らず、祐子は解放されたような妙な安堵感を抱いた。祐子が後部座席に乗り込むと、直ぐに二人の男が左右から祐子を挟

む形で乗り込んで来た。さっき尿意を催したとき、祐子は心の中で叫んだ。

「よし、死んでやる。もう、この身体に未練は無い。どうなっても構わない。だけど、心はあの人以外の誰にも渡さない。意識はいつもあの人と一緒にだ」

そう決心すると、もう怖いものは何も無かった。

「わたしはあの一とへの愛を持って、死んでゆく。誰に何をされようと、何も怖くない」

祐子は両手を前で縛られた。左の男が祐子の手の上にタオルを掛けた。その後で完全に遮光されたサングラスを掛けられた。しかし、もう袋を被せられないで済んだ。車は元来た道に戻っているようだった。サングラスや手を縛る布の紐などがどこからか直ぐに出てくるので、祐子はこの誘拐が事前に計画されていたものだと思った。サングラスの遮光グラスの周囲から漏れ入る光を感じたが、現在の場所を特定することは難しかった。祐子は勇気を振り絞って言った。

「わたしをどうするつもりなの？」

誰も答えなかった。

「ねえ、殺すなら、早く殺してよ。男らしく。さっさと殺ってよ！」  
右側の男がどすの利いた声で言った。

「うるせえ！あんた、自分の立場が分かってねえな」

「わたしをなぶりものにするんなら、わたしは舌を噛み切るから」

「そう、じたばたするな。猿轡を噛まずぞ」

祐子は猿轡をかまされては、何も話せなくなると思い、口を閉じた。それから暫らくの間、祐子の感覚でおよそ15分ほど走ると、祐子を眠気が襲って来た。

「よしこうなったら体力勝負だ、寝れるときに寝てやる」

祐子は縛られた状態で眠りに落ちた。昨夜は一睡もしていなかった。体が横に傾かないように意識して眠ろうとした。しかし、祐子の身体は次第に左側の男の方に傾いて行った。暫らくして、「ぼしっ」と何かが激

しくぶつかるような音がした。祐子はその音に驚いて眼を覚ました。

「ひえー、兄貴、勘弁してくださいえ！俺、我慢できなくなっちゃって……」

「てめー、親分を舐めていやがるのか!?! 指一本触れるなどあれほど言われたらろうが」

「すいやせん。もう、しません」

「いい度胸してるじゃねえか。指でも詰めて欲しいのか？」

「兄貴、許してやってくださいえ。おれが悪かったっす」

「今度、変な真似をしてみろ、指だけじゃ済まねえぞ」

「へい、肝に銘じます。許してやってくださいえ」

右の男は返事をしなかった。その重苦しい雰囲気、左の男の怯えが一層大きくなってゆくのを祐子は感じた。どうやら、左の男が右の男に平手打ちを食わされたようだった。左の男が自分の身体に触（さわ）ったようだった。しかし、祐子は触（さわ）られたことに全く気付かず、熟睡していた。どれほど寝ていたのかも分らない。

「腹減ったな。おい、コンビニで停めろ！」

「へい！」

今まで、一言もしゃべらなかつた運転をしている男が返事をした。車は高速道路から降りているようだった。それから5分ほど走って、車が止まった。左の男が震える声で言った。

「兄貴、お、俺が買って来やす」

「へまするなよ。紳士でやれ。きさまの指はおれが預かってることを忘れるな！」

「へい！」

左の男がドアを開けて出て行った。右の男が、祐子の肩に手を廻した。しかし、肩には直接触れないようにしている。祐子は外から見た者に、自分を愛人のように見せようとしているのだと判った。3分ほどして左の男が戻って来た。ドアを開けて車に乗り込み、ドアを閉めると、右の男が言った。

「出せ！」



「へい！」

車が動き始めたのが判った。左の男が言った。

「パン4個と、やーいお茶2本、真昼の紅茶2本買って来やした」

「よし」

「兄貴はどのパンにしやすか？それとお茶と、紅茶はどっちにされやすか？」

「何でもいい、配れ！」

「へい！」

左の男がパンと茶を配っているようだった。車は走り続けている。左の男が茶のペットボトルの蓋を開けたようだった。少し呑んでいるのが判った。右の男はまだ、祐子の肩に手を廻したままでいる。

「兄貴・・・ちょっと聞いてもいいですか？」

「なんだ」

「あの、さっきおれはこの女の足に触ろうとして、兄貴に叱られやした。なのに、兄貴は、この女の・・・」

そこまで言い掛けた時、右の男の体が急に祐子にぐっと圧しかかったと思うと、祐子の前に何かが横切り「ばしっ」と板が割れるような音がして、祐子の顔に水滴が掛かった。いきなり右の男が左の男に平手打ちを食らわせたようだった。

「うえーん・・・兄貴、済んません。済んません。兄貴のすることにけちを付けて、済んません」

左の男は泣き出した。何がなんだか分からないという体だった。殴られたとき、ペットボトルの茶が祐子に掛かり、食べ掛けていたパンが飛び散ったようで、ペットボトルとパンの入った袋が祐子の足元に落ちるのが分った。祐子が言った。

「あなた、この人がわたしの肩に手を掛けているのは、外の人に感付かれないようにする為なのよ、こうしているとわたしがこの人の愛人みたいに見えるでしょう。この人、わたしには触ってないのよ。そんなことも分からないから殴られるのよ」

祐子は右の男を少しでも味方に付ける可能性を探っていた。

「兄貴、そうとも知らずに、許してやってくださいませ。おれは馬鹿だから、分なくて。許してやってくださいませ」

右の男が言った。

「姉さん、流石は親分がお見初めになるだけのお方です。恐れ入りました……きさまは、いつまでもてめえのことばかり考えないで、上のもんに言われたことを、しっかり守ることを覚えろ。てめえのことは二の次にしろ。散散教えてきたじゃねえか。それがこの世界の生き方だ。いつまで経ったら分るんだ」

祐子はこの男たちがどこかのヤクザの組の者たちで、親分の指示に従って自分を誘拐したのだということが分かってきた。右の男が言った。

「姉さん、紐を解きます。どうか、つまらない考えを起こさんでください。車の中ですから……これがパンで、これが紅茶です」

そう言いながら、パンの袋を祐子の左手の掌の中に、ペットボトルを右手の掌の中に押し入れた。祐子は右の男の自分に対する態度が変わったことが、小気味よかった。

「ありがとう。あなたって優しいところもあるのね」

右の男は黙っていた。左の男が落ちたパンを拾おうとしているのを祐子は感じた。ペットボトルの茶は足元で流れ出してしまったようだった。右の男が言った。

「きさま、パンと茶はおれの分をやるから、落ちたものを拾うな。いいな。それが俺たちの生き方だ」

「へい、兄貴、ありがとうございます」

左の男は涙声で言った。それから少しして、左の男と、運転をしている男がパンを食べ、茶を飲んでいるのが分った。祐子もパンを食べた。もう昨夜のアルコールは完全に消えていた。運転している男が言った。

「兄貴、あと10分くらいで着きやす」

「分った」

祐子はこのときを除いてチャンスは無いと思った。

「わたしの携帯を返して。昨日買ったばかりなんだから」

男たちは黙っている。

「ねえ、返してよ。母から電話があったはずよ。今頃、皆大騒ぎのはずよ」

「おい、かばんの中を調べろ」

「へい」

祐子は運転している男が助手席から祐子のビジネスバッグを掴んで、左の男に渡したのが分った。左の男はそれを自分の膝の上に置いていじっているようだ。

「兄貴ヤベーですぜ、直ぐに捨てちゃいましょう」

左側の男がうまく乗って来たと祐子は思った。

「きさま、それを壊せるか？」

ドスの利いた低い声で、右側の男が言った。

「へえ、中身を消しちゃ大丈夫す。消し方知ってやす。全部消しやすか？」

「よし、やれ」

やれと言われて、左側の男は携帯の電源を入れた。携帯がダウンロードを始めたようだった。男が操作を始めるまでに15秒ほど掛かった。データ消去と思われる操作には5分近く掛かった。完了したと見えて男が「終えやした」と言った。祐子は、彼らがSIMカードについて知らないようなので、ほっとした。電源の入っている5、6分の間に、この携帯の位置が確認されることを祈った。右の男が言った。

「電池を抜いて、指紋を消せ。消したら窓から捨てろ、そこの川目掛けて投げろ」

「へい」

窓が開くときのモーター音がして、男が携帯を投げ捨てたのが分った。

「兄貴、すんません。川に届かなかったす」

「ばっきゃろう、てめーは何をやらしても、どじばっか踏みやがる・・・中身はちゃんと消したんだろうな」

「へえ、兄貴、済んません。全部消しやした。メールも、電話番号も、

写真も、歌も、全部消しやした・・・カバンはどうしやすか？」

「馬鹿が、親分に持って帰れって言われたらろうが」

「へい、済んません。そうでやした」

それから暫らく走って、車が止まった。3人はまた何も話さなくなった。

右の男が言った。

「姉（あね）さん、降りてください」

佐世保

祐子は二人の男に両方から腕を抱えられて歩いた。それからエレベータに乗ったようである。何階か分らないが15秒ほどしてからガタンと音がしてエレベータが止まった。扉が開き、男たちに連れられてまた暫らく歩くと、男たちは止まり、体の向きを変えた。3人の内の誰かがドアをノックした。少ししてドアの開く音がした。祐子は戦慄を覚えた。危険が迫っていると感じた。心の中で強く賢に助けを求めた。

「あなた、助けて、どこかの部屋に連れて来られたわ。ビルの中よ。助けて」

「連れてまいりました！」

兄貴と呼ばれていた男が言った。

「ごくろう！」

別の男の声がした。聞き覚えがある。祐子は男たちに部屋の中に連れ込まれたのが分った。

「そこだ！」

「へい！」

祐子は小山田だと思った。ぞっとするような戦慄の後、憎悪と嫌悪感が襲ってきた。祐子は椅子に座らされた。硬い背もたれのある、座り心地のあまり良くない椅子である。一旦手を縛っている紐が解かれたが、直ぐに手を背もたれの後ろに廻され、背もたれの下の方に括り付けられた。祐子は、まったく抵抗しなかった。下手に抵抗すると、自分が傷つくことを知っていた。

「親分、これでよろしいでしょうか？」

兄貴と呼ばれていた男が言った。

「しっかり縛ったか？」

「はい、姉さんはこれで逃げられないと思います」

「よし。きさまら、祐子さんを大切に扱って来ただろうな」

「はい、優しくさせていただきました」

「なに？優しくだと、誰が優しくしろと言った？ばかやろう、色気を出しやがって、大切に扱えと言ったんだ」

「済みません、言葉を間違えました。大切にさせていただきました」

「よし、まあいいだろう。で、書類鞆は持ってきたのか？」

「へい、ここにあります」

左に乗っていた男がそう言いながらかばんを差し出したようである。小山田はかばんを受け取って中を調べている。

「おい、これだけか？」

兄貴と呼ばれている男が答えた。

「はい、携帯がありました、途中で処分しました」

そのとき、突然、「ばしっ」と大きな音がし、それに続いて男のよろける音が聞こえた。

「馬鹿やろう、誰が捨てろと言った。大事な情報源を捨てやがって、馬鹿が」

二人の男たちの震えている様子が、祐子には手に取るようにわかった。兄貴が言った。

「親分、許してください。俺が中身を消させて、捨てるようにこいつらに言いました。それから、電池を抜いて車の窓から捨てさせました」

「なに！足が付くじゃねえか!?馬鹿が。もちろん、川か海に捨てただろうな」

「そ、それが、川に届かなくて、草むらに落ちました」

「なに！貴様、何年飯を食ってる。捨てる時は川か、海かってことも分からねえのか？情けねえ。おい、小僧、おめえは直に戻って拾って来

い。きさまは今から祐子さんの服と下着を買って来い。店員に聞いて、一番流行（はやり）のやつを買って来るんだぞ」

「へい！」

若い二人の男は出て行った。兄貴と小山田だけが残った。

「おめえは、事務所に行って、この鞆の中身を詳しく調べろ。それから、俺たちに手が回ってねえか調べて来い。いいか、分からねえようにやれ。分ったら直ぐに行け」

「はい。親分、やはり親分はお目が高いですね。恐れ入りました」

「余計なことはいいから、早く行け」

兄貴も出て行った。祐子はいよいよ覚悟を決めなければならないと自分に言い聞かせた。何をされても、抵抗するのはやめよう。自分は抜け殻になろうと心に決めた。それから、賢に向けて祈った。

「あなた、これから、わたしは自分を抜け殻にします。わたしはもう、何も考えません。何も感じません。何もしません。ただ自分の姿を見つめます」

「へっへっへ、祐子さん、本当はこんなことはしたくなかったんですよ。あなたが、素直に言うことを聞いてくれればね。まあ、目隠しを取りましょう。手の方は少し待ってくださいね」

体にまとわり付きそうな、べたべたした声でそう言いながら小山田は祐子の目隠しを外した。祐子は目を瞑ったままでいた。全身の力を抜いた。

「まあ、なんと美しい人だ。ワシはあんたに一目惚れしたんですよ。ワシは社長だから、あんたの欲しいものは何でも買ってあげますよ。ワシの女になってくれればね。まあ、もう嫌とも言えないでしょうけどね。段々ワシのことが良くなって行きますよ。へへへ・・・」

祐子は何の反応も示さなかった。意識を賢のもとに置いていた。小山田が右手で祐子の頬を撫でた。それでも祐子は微動だにしない。小山田は祐子の唇に口付けした。そして祐子の口の中に舌を押し込んだ。祐子はされるままになっていた。顎に力を入れることも、舌を動かすこともしなかった。小山田は祐子が反応しないと見ると、今度は舌で祐子の唇を

舐めまわした。祐子はこんにやくのような、何かぬるっとしたものが唇に触れているという感覚を持っただけだった。小山田はそれでも祐子が何も反応しないと見ると、一旦顔を離れた。

「そうか、そうか、待っているよ。こんなのじゃ物足りないんだな。よしよし、もっと可愛がってやるからな」

そう言うと、小山田は祐子のスーツのボタンを外し始めた。それでも祐子は全く反応しない。祐子の前がはだけ、キャミソールが現われた。小山田はスーツを肩からずりおろし、キャミソールを外した。祐子は自分にされていることを、瞑目した状態で唯、感覚が受け取るだけの状態にした。

「やっぱ、祐子さんは胸もボインだな。一寸挿ませてもらうよ」

そう言って、小山田はブラジャーを下にずり降ろした。それでも祐子は自分から身体を動かすことはしなかった。小山田は、暫らく乳房を揉んでいたが、やがて乳首に食らい付いた。祐子は強い刺激を受けたが、性的な感覚は全く無かった。小山田は身体を屈（こご）めて乳房を掴み、乳首を貪るように吸った。祐子は全く反応を示さなかった。祐子は何かが自分の胸に吸い付いているような感覚を覚えた。自分のされていることを只、静かに五感で感受していた。しかし、感受し認識するだけで、そこからの意識や思考への経路は絶っていた。祐子はまるで、美しい木偶人形だった。

「どうしたんだ、祐子さん、不感症ですか？しょうがないな、じゃ、もっといい気持ちにさせてやりますよ。ワシのは太くて硬いから、すぐに行かせてやりますよ。まあ、待っててくださいよ。暴れたら、さっきの奴みたいになりますよ。おとなしくね。そうそう」

そう言うと、小山田は祐子を椅子に括り付けている紐を解いた。祐子の手はだらりと下に落ちた。まるで、植物人間の様だった。小山田は祐子の衣類を剥ぎ取った。何かぶつぶつ言いながら必死に自分の服を脱がせている小山田の行為に対し、祐子は完全に力を抜いて、されるままにした。祐子は完全に裸にされた。小山田は自分の衣類も脱ぎ捨てた。裸に

なってから、祐子をソファの上に横に寝かせ、貪るように祐子の身体をいじり始めた。祐子は自分が何をされているのか感受するのも絶った。完全に無心で、脱力仕切っていた。小山田の声で祐子は意識を自分に戻した。

「今日は止めだ。服を着ろ」

小山田の言葉が乱暴に響く。祐子の体の上に投げ出された下着と洋服を、祐子は思考を止めて身に付けた。祐子はその場にボーっとして座っている。

「おめえ、本当に不感症だな。おれもとんだ貧乏くじを引いたもんだ。危ねえ橋を渡ってまで、手に入れたのにな。まあ、また後で楽しませてやるぜ。まだ陽は高けえからな。ええっ」

小山田が不機嫌なのを、祐子は知った。しかし、そのことに対しても一切の思考も、反応もしなかった。小山田は服を着た祐子に近付いて頬を撫ぜたり、髪を摩ったりした。

「なあ、祐子さんよ。男と女になろうじゃないか。ええっ!? あんたが木偶じゃ、おれもぜんぜんその気になんねえよ」

小山田の言葉にも、手の動きにも何の反応も示さないの、小山田は祐子の身体をソファの背に突き飛ばした。

「ちえっ、面白くねえ」

その時ドアを叩く音がした。小山田がドアのところに歩いて行ってドアノブを急に引いた。

「親分、ただ今帰りやした。姉さんの服を買って来やした。親分、ご検分をお願いしやす」

そう言って小僧と呼ばれた男が紙袋を小山田の前に差し出した。その紙袋を覗き込みながら小山田が言った。

「ご苦労だったな。だが、もう要らねえかもな」

「親分、済んません。許してやってくんなせえ」

小僧と呼ばれた男は自分に何か落ち度があると考えたようだった。

「いや、おめえじゃねえ。ご苦労だった。二人で飯でも食え」



そう言うと小山田はズボンのポケットから黒い長財布を取り出し、そこから1万円札を2枚出して小僧に渡した。

「親分、ごつつあんです。じゃ、失礼してもいいですか？」

「いけ！」

小僧が去ると、小山田は袋を祐子の元に持って来て、祐子の目の前に差し出しながら言った。

「祐子さん、これに着替えてみてくれませんか？」

祐子は黙って目を閉じたままである。袋には眼もくれない。

「俺の言ってることが聞こえねえのか？ええっ!？」

小山田はやや興奮気味になってきた。それでも祐子は瞑目したままでいた。小山田はその袋を振り上げると、壁に向かって投げつけた。袋は飾り台の上の空の花瓶にぶつかり、花瓶が床に落ちてガチャンと音を立てて割れた。それでも祐子は動かなかった。その音も祐子には都会の喧騒となんら変わらない音のように、ただ感受しているだけだった。

「くそ、面白くねえ」

小山田は吐き出すように言った。その時激しくドアをノックする音がした。小山田はびくっとした。直ぐにドアに近付くと覗き穴から外を伺った。小山田は急いでドアを開いた。兄貴だった。

「親分、やばいです。もう、手が回ってます。警察が捜査令状を持って来たと受付の女が言ってます」

祐子は兄貴の言葉に反応した。意識を自分の身体に戻した。

「中に入れ、誰にも追跡（つけ）られなかっただろうな」

「大丈夫です。手はず通りにしますか？」

「そうだな、この女は駄目だ。そう簡単に落ちない。このまま渡すしかねえな。いいか、今日の夜の便だ。俺はこの女を連れて行く。おめえは白を切り通せ。小僧を片付けとけ。さっき飯を食うように言っといた。それから、鞆はどうした？」

「めぼしい情報が無かったので、来る途中、焼却ゴミ処理所に寄って、焼却待ちのごみの中に放り込んで来ました」

「おめえは、役に立つ奴だな。よし、こうしちや居られねえ。俺は一旦事務所に戻って、やばい書類を処分して来るから、戻ったら直ぐに出るぞ。車を廻しておけ。もう、荷物は用意してある。この女は腑抜けになっているが、念のためにもう一度椅子に括り付けておけ。商品だから傷物にするなよ。結構高く売れるかも知れねえからな」

「はい、分かりました。親分、事務所には地下の焼却ごみ処理用の通路から入ってください。他の入り口には警官が張り込んでます」

「分った」

兄貴は祐子をソファから立たせ、抱えるようにして椅子のところに連れてゆき、再び椅子の背に両手を括り付けた。祐子は兄貴が自分の手をいたわるように、そっと縛っているのが分った。兄貴が言った。

「姉（あね）さん、申し訳ありません。俺にはどうすることもできませんから。姉さんの靴の中敷の裏に俺の仲間の電話番号を入れときます。これは絶対秘密ですよ。日本人ですから、いざというときは助けてくれると思います。俺の名前は須佐能と言います。神様みたいな名前でしょう。俺も、やむを得ずこの道に入った男です……」

須佐能がメモを隠した靴を祐子に履かせた。祐子はそれまで、自分が裸足であることさえ忘れていた。どこで靴を脱がされたのかも記憶に無かった。

「ありがとう。あなたは優しい人ね。忘れないわ」

それから少しして、ドアをロックする音がした。祐子の左側に乗っていたきさまと呼ばれていた男が戻って来た。

「兄貴、済んません。あそこには警察が一杯張りこんでいて近付けやせんでした。済んません」

須佐能は封筒を男に渡しながら言った。

「おい、牛山、もう手が回ってる。ここに20万ある。杉村は飯を食いに出た。杉村を探して一緒に逃げろ。急げよ。いいか、絶対ここに戻って来るな。戻ったら命が無いぞ。先ずタクシーで佐賀まで出る。そこから消えろ、いいな。今直ぐ行け」

牛山は震えながら封筒を受け取ると、駆け出した。一旦停まって後ろを振り返ったが、少し頭を下げてから、そのまま走り去った。

須左能が祐子の近くに帰って来た。

「須佐能さん、あなた、そんなことして、あなたの身に危険が及ぶんじゃないの？」

「姉さん、俺はもう死んでいるんです。怖いものなんて何にもありませんぜ。指でも、手でも、足でも、この命だって無くなっても何でもありませんよ。それより姉さん、大した度胸ですね。敬服しました。親分に掛かって落ちなかった女は、俺の知ってる限り、姉さんを置いて他にいませんぜ」

「落ちるも何もないわよ。わたしは意識を体から外しただけよ。暫らくの間、わたしはここに居なかったのよ」

「すごいことができるんですね。たまげたもんだ」

「ところで・・・」

祐子がそう言い掛けた時、激しくドアがノックされた。祐子はどうして自分を解放してくれないのか聞こうと思ったのだが、須左能との会話はそれが最後だった。

祐子はまた意識を賢の下に移し、元の腑抜けの状態に戻った。ただ、人の声だけは聞き続けたが、五感への反応は一切遮断した。

祐子が自分に戻ったのは、大勢の女性たちの中に放り込まれたときだった。サングラスを掛けられていたので、どこをどう通って来たか分らなかったが、途中で踏み段を登らされた時、船に乗せられるらしいと感じた。よろけそうになると前後にいる男が祐子を支えた。その時も腑抜けの状態になっていた。階段を登り切ると、揺れている床を歩き、どこかの入り口を入り、そして今度は階段を降りることを強要された。言われるとおりに綱で結わえられた両手を使い、手探りで手摺に捕まりながらゆっくり階段を降りた。男が先に立って支えていたので、何とか降りることができた。下に着くとサングラスを外され、手の綱を解かれて人ごみの中に押し出された。そこには女たちがひしめいていた。

祐子を連れて来た二人の男の片方が言った。

「ほれ、仲間だ、仲良くしな。暫らくは一緒だからな」

その言葉で祐子は意識を元に戻した。小山田からは逃れられたようだと  
思った。しかし、そこは地獄の2丁目に過ぎなかった。かなり大きな船  
の船底のようだった。どう観ても客船ではなさそうである。祐子はひし  
めきあっている女性たちの間を縫って部屋の隅に行こうとした。その時、  
船が揺れた。誰かの足を踏んだような気がした。

「ちょっと、あんた、なんとか言うんじゃないのかい!？」

「すみません」

「なんだい、立ったままかね。ご挨拶だね」

祐子は屈（こご）もうとしたが、辺りは女性達で一杯でそんな隙間は無  
い。

「すみません。しゃがめないので、許してください」

「おお、そうかい。じゃお返しをしてやるよ」

そう言うと、その女はいきなり祐子の右脛を蹴った。祐子はよろけた。  
よろけた時に別の女性の頭に祐子の右肘が当たった。

「痛てえな！」

怒鳴るような声で、祐子は一括された。

「済みません」

「あんた、いい度胸してるじゃないか、ええ!? ゆうこ姉さんを小突い  
てさ。どう落とし前をつける気だね」

大声を出した女性の隣に居た、顔が小さく眼が丸く鋭い、山猫のような  
女が言った。祐子は頭を下げた謝った。

「すみませんでした」

その時、階段に登ろうとしていた男が怒鳴った。

「おい、そいつをいじめるんじゃないねえぞ。Sだからな。分かってんだろ  
うな」

その言葉で、突っ掛かって来た山猫のような女は少し身を引いて祐子の  
通る隙間を作った。祐子は何のことか分らなかったが、周りの女たちが

作ってくれた隙間をすり足で進んで、やっと一番隅の天井に頭が付きそうな所に腰を降ろすことができた。そこは薄暗く、床もじとじとしていて、座り心地が悪かった。古い雑巾の蒸れたような匂いがする。祐子はそこに正座して座った。どうやら、船が動き始めたようである。祐子を連れて来た男が階段を登り切って姿が見えなくなると、先ほどの山猫が、聞こえよがしに言った。

「おやおや、Sさまはお行儀もおよろしい様で」

その女の回りにいる10人ばかりの女たちが一斉に笑った。祐子は自分の身に降り掛かり続けるこんな状況も、自分が呼び寄せているのだろうかと思った。賢なら簡単に解決するだろうなと思って、「ふふっ」と笑った。その笑いをゆうこ姉さんと呼ばれた女は見逃さなかった。小さい声で言った。

「あのあま、舐めていやがる。今夜を楽しみにしていな」

祐子は、この日が如何に凄い日だったかと思い返した。橘との事から始まった一日だった。祐子は拉致された車の中で1時間ほど寝ただけだった。しかし、今は眠気は感じなかった。緊張もしていない。絶望もしていない。嬉しくも、悲しくもない。こういう状態をなんと謂うのだろうかなどと考えた。そしてあまりの突然の馬鹿げた変化が可笑しくなり、声を出して笑い出した。

「わっはっはっはっはっは……わっはっはっはっはっは……  
わっはっはっはっはっは」

祐子は笑い続けた。周りにすわっている女性は、度肝を抜かれた。しかしゆうこ姉さんと呼ばれた女は、気に入らないようだった。その取り巻きと思われる女たちは、祐子の笑いが聞こえないかのように平然としている。ゆうこ姉さんは祐子に聞かせるのには十分すぎる大声で言った。

「まったく、騒々しいね！何処の馬鹿だ！」

祐子は笑いを堪え（こらえ）られなかった。

「わっはっはっはっは……わっはっはっはっはっはっは……  
わっはっはっはっは」

ゆうこ姉さんは、更に大きい声で怒鳴った。

「おい、そこの新入り、おめえ、舐めてんのかよう!？」

祐子はその言葉で我に返った。

「済みませんでした。今日のわたし、運命が急転直下して地獄に落ちたような気がしてきたもので、あまりの変化に、自分の人生ってそんなに滑稽なものなのかって、つい可笑しくなっちゃって」

「何がだよ。人を舐めとったらただじゃ済ませねえぞ」

ゆうこ姉さんは凄味を利かせた。祐子はこの日のことを淡々と話した。

「わたしはフィアンセがいたんです。それなのに昨日の夕方一緒に食事をした友人に犯されたんです。そのショックで眠られなくて、今朝、頭を冷やそうと会社に歩いて出掛けたら、その前の日からわたしを狙っていた、誘拐グループに袋詰めにさらわれて、連れ去られたんです。気が附いたら、男がわたしの身体を裸にして弄んでいました。わたしは腑抜けのようになりました。それから、わたしの誘拐を指示した男は「手が回った」とか言って口封じに仲間を殺すように部下に命じていました。あまりの陰湿な雰囲気、怖さも通り越しちゃいました。あいつはわたしを売り飛ばすようなことを言ってました。それからわたしはここに連れて来られたんです」

「なんだよ、それでもSなのか!？」

ゆうこ姉さんは少し、トーンを落として言った。何人かの女が涙を拭いているのが分った。祐子はきっと、彼女たちも自分と同じような目に遭ったんだと思った。それから暫らくは、女たちはほとんど無口になった。時々ここそこで2、3人が塊りになって、ひそひそ話をしていたが、祐子にはよく聞き取れなかった。そこには60人ほどの女性達が居た。祐子が船底の側面と思われる壁に寄り掛かっていると、直ぐ隣にいた35歳くらいの、中背の下膨れの巫女のような女性が身体を祐子の方に寄せるとして囁いた。

「ここはどこ？わたしは八戸で、騙されて乗せられたのよ、ハローワークを出たところで、いい仕事を紹介するって言われて附いて行ったら、

途中で急に態度が変わって、脅されて、目隠しをさせられてここに連れて来られたのよ。わたしが載せられた時は23人しかいなかったのよ。途中で大勢乗って来たのよ。あの怖い姉さんも、途中で乗って来たのよ。ここで新しく載せられたのはあんたで5人目よ」

「ここは九州のどこかの港だと思うわ。わたしも目隠しをさせられていたから、詳しくは分らないけど」

「あいつら、わたしたちを外国に売り飛ばすつもりよ」

祐子はその言葉を聴いても動じなかった。

「皆、こんな場所でよく生きてられるわね。どうやって寝るの？それに、食事やトイレはどうしているの？」

「あの奥に扉が見えるでしょう。あの扉の向こうに部屋が2つあって、一つ目の部屋が厨房になっているの。男の命令で、順番に食事の準備と片づけをするの。あそこに米とパンとたくあんがあるのよ。食事はご飯とたくあんか、パンそれとコップ半分の水だけよ。その横の部屋が毛布を入れてある部屋よ。リネンね。その部屋は危ないのよ」

「危ない？」

「中に男が潜んでいることがあるの。下手に行くと、そこでやられちゃうわ。この男たちも飢えているから、チャンスを伺っているのよ。それを知ってて、あそこに行く人もいるわ。自分だけいい目を見ようとしているのよ。だけど、就寝の時間になると監視が来るから、その時は男達も姿を消しているわ」

「トイレは？」

「その部屋の前に扉が二つあるわ、手前がトイレ。汚いトイレよ。誰も掃除なんてしてないのよ。向こう側が浴室、とは言っても、1日に10人だけ、水が洗面器1杯分しか使えないから、そこにあるタオルで身体を拭くだけよ。タオルは6枚しかないわ。1日に1枚だけ。だから、最後の方の人は汚いタオルを使うしかないのよ。下手すりゃ、病気が感染（うつ）るわ。まるで豚箱よ。あんた、生きていく自信はあるの？わたしはもう8日もここで生きてるけど」

「わたしはもう、この身体に未練は無いのよ。生きていけるのか、死んでしまうのか、見届けようと思っているの」

「へえ、すごい覚悟ね」

「るっせえな、ぺちやぺちやと！」

先程祐子にけちを付けた山猫が言った。下膨れの女は祐子の方に近付いていた身体を元に戻した。

「ゆうこ姉さんがお休みなんだよ」

その時、階段の近くに座っていた女が大声で言った。

「静かにしな、黙って聞いてりゃゆうこ姉さん、ゆうこ姉さんって、どこのブタ小屋から出て来たかかわからねえ、カスが騒ぐんじゃねえ！」鼻が尖って、眼の鋭い秋田犬に似た顔つきの女だ。先ほどから威張り散らしていた山猫は、つと立ち上がって周りの女たちを踏みつけながら秋田犬に近付くと、いきなり殴り掛かろうとした。秋田犬は山猫の振り上げた手を掴むと捻り上げ、山猫の背中に押し付けた。

「てめえはブタの子分か？ええっ？それじゃ便所蠅（べんじょばえ）ってどこか。どうりで五月蠅いわりにゃ、弱いわけだ。ここは人間様の居る場所だ。てめえは便所にでも行って座ってな」

そういうと秋田犬は山猫をトイレのドアのある方に突き飛ばした。トイレのドアの前には誰も座っていなかったので、山猫はそのままつんのめるように床に転がった。喧嘩を売られたゆうこ姉さんはゆっくりと立ち上がった。そして秋田犬の方にだらりだらりとゆっくり歩み寄った。周りに居た女たちは皆、怯えたように道を空けるために壁際に詰めた。

「おい、糞臭せえばあさんよ、家（うち）の猫をよくも可愛がってくれたな。一寸お礼をさせてもらうぜ」

祐子は「山猫に似た女はやはり「猫」という渾名（あだな）だ」などと考え、面白くなって、また大声で笑った。

「わっはっはっはっはっは・・・」

祐子に他意はなかったが、その笑い声に殺気立っていた二人の女はキツツとなって祐子を睨み付けた。ゆうこ姉さんが怒鳴った。



「おい、糞臭せえ婆（ばばあ）、先にあいつを黙らせるから、一寸待つてろ。おめえも、命が長引いて……」

と言い掛けた時、秋田犬がゆうこ姉さんの脚を思い切り払った。ゆうこ姉さんは、その場に転げた。血相を変えると、立ち上がり、平気で座っている秋田犬の顔面に向かって左足で蹴りを入れた。一瞬、秋田犬は身を躲して、その脚を払った。ゆうこ姉さんは再びその場にひっくり返った。その時、階段の頂上の入り口の鉄の扉が開き、男が降りて来た。二人はその場で、動きを止めた。まるで何事も無かったかのようである。男が言った。

「何してる！」

二人の周りに空間が出来ていて、何かあったことは明白だった。

「いえ、旦那、ちょっと、お話をさせていただだけです」

ゆうこ姉さんが言った。

「揉め事を起こしたら、どうなるか分かってるな！俺は女を傷つけるのは好きじゃねえからな」

「旦那、何でもありませんよ……なあ、皆、わたしらお話をしてくれただよな」

山猫がフォローした。

「旦那、なんでもありませんよ」

男はそれ以上追及することはしなかった。

「飯の時間だ。今日の当番、支度をして、みんなに配れ。いいな、皆同じように配れよ。今日入った5人は、みんなから順番を覚えてもらえ。それと風呂と便所の使い方もな」

階段の近くの扉の横に座っていた二人の女性「はい」と返事をした。

「よし、準備に掛かれ」

二人の女性は立ち上がると扉を開けて出て行った。男はそれを確認するとまた、階段を登って行ってしまった。それを確かめでもしたかのようによゆうこ姉さんが言った。

「婆さん、この続きはまたにしようぜ」

秋田犬は黙っていた。ゆうこ姉さんは元の場所に戻って座った。

30分ほどして食事が配られた。ドアを開けて、大きめの盆に載せた金属製の食器にご飯が盛られている。ご飯の上にタクワンが2切れずつ載せられていて、金属の箸がご飯に刺してある。祐子は、まるで靈膳の盛飯だと思った。食事を配っている女は小柄で丸顔のラッコのような印象を与えた。もう一人の女は背が高く、面長で、胡瓜のようである。二人とも30歳前後に祐子には見えた。胡瓜のような女は40センチ四方くらいの盆にプラスチックのコップを並べて持って来て、食事が配られた者に、順にコップを渡している。水の入ったコップである。どの女も、無表情に、ご飯と水を受け取っている。受け取っても置く場所もない。どの女も、胡坐をかいていてご飯の入った食器を手に持ったまま、水の入ったコップを股の間に挟み込んでいる。二人の女は、盆が空になるとドアから出て行って、また次の配給分を持って来た。それを繰り返した。祐子はご飯を受け取ったときに、

「ご苦労様。ありがとう」

と言った。ラッコは少し微笑んだようだが、何も言わずに次の女に食器を渡して行った。祐子は水を受け取ったとき胡瓜に対してもまた、

「ありがとう、大変ね」

と言った。胡瓜は何も言わずに、その言葉が聞こえないかのように、つぎの女に水を渡そうとした。ゆうこ姉さんが祐子に聞こえるように言った。

「るっせえな、いちいちしゃべるんじゃねえよ！黙って、食え！」

祐子は

「頂きます」

と言ってから、一口水を口に含み、コップをみんなと同じように股の間に挟んで、食器を持ち上げ箸を抜くと、ご飯を摘んで口に持って行った。ゆうこ姉さんが独り言のように言った。

「全く気に入らねえ、メスだな。いちいち逆らいやがる」

30分ほどして、先ほどの2人が片付けを始めた。黙々と食器・コップ

を回収している。祐子のご飯を全部平らげた。昼にパンを食べただけだったので、空腹だった。祐子は3人ほど、食事に全く箸を付けていない女達が居るのに気が附いた。係りの二人は「いい？」と聞いて、3人が頷くのを待ってそれを回収した。その3人は肩を寄せ合って固まっている。まだ中学生か、高校生程にしか見えない。唯、3人とも化粧が濃く、マニキュアも塗っている。全員の分が片付けられると祐子は先ほど語り掛けて来た女の方に身体を寄せて聞いた。

「あの娘（こ）たち何時入って来たの？」

「昨日よ。あんたの前の3人だよ」

「まだ高校生ぐらいじゃない？」

「うん、わたしもそう思う」

祐子はこの犯行グループは、未成年者まで誘拐しているのだと思った。食後の片付けが済むと、係りの2人は直ぐに毛布を配り始めた。祐子は汗臭い臭いのする毛布を受け取ると、自分の膝に掛けた。狭い場所しか与えられてない所で、どうやって寝るのだろうと思い、いろいろ考えを巡らせてみることにした。それが結構面白い思考ゲームだった。「2人ずつ抱き合って寝る？・・・いやそれじゃ眠れない・・・交代で寝る？・・・寝不足になっちゃう。座ったまま寝る？・・・ヨガみたいだ。でもいいかもしれない。わたしはきっとこのパターンだ。瞑想も出来るし・・・じゃんけんで勝ったものが寝る。負けたら立っている？・・・無理だ・・・重なって寝る？・・・下の者が苦しい。でも、わたしもあなたの下で寝たこともある。これかな？仲がよければいいけど・・・無理だな。やっぱり座ったまま寝るんだ。後は野となれ山となれだな」そんなことを考えていると、瞼が自然に落ちて来た。

「バキッ、ドスン」

すごい音と共に、顔に衝撃を感じ、次の瞬間に自分の体が壁にぶつかるのが分った。祐子は驚きで目を覚ました。まだ、誰も寝ていない。ゆうこ姉さんが自分の席に戻って行くのが分った。顔と後頭部がものすごく痛い。彼女が自分の顔を蹴ったのだと分った。祐子は痛みの中で、また

自分の人生の転換点があまりにも劇的なのが可笑しくなった。可笑しさが込み上げて来て笑い転げた。

「わっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは」

ゆうこ姉さんが座るか座らないうちに立ち上がって、祐子めがけて突進してきて、いきなり祐子の頭を蹴った。

「きさま、ひとをなめるのもいい加減にさせ！」

ゆうこ姉さんはヒステリックにがなり立てた。祐子にはもう笑う余裕は無かった。眩暈がしてきた。ふらふらとすると祐子はその場にどっと倒れた。しかし、意識はしっかりしていた。ただ、ものすごい痛みがあり、目がくるくる回るようだった。

「ばかが、ざまあみろ！」

周りの女たちはわなわなと震えている。泣き出した女もいた。その時ゆうこ姉さんの後方に秋田犬が近付いて来た。秋田犬はいきなり振り返ったゆうこ姉さんの腹を蹴った。ゆうこ姉さんはガクッと膝を落とした。秋田犬は膝でゆうこ姉さんのこめかみを蹴り込んだ。ゆうこ姉さんの額が切れて血が流れ出した。秋田犬はゆうこ姉さんの襟首を掴んで無理やり起き上がらせると、左右の頬に平手打ちを食わせてから、拳(こぶし)でその頬を思い切り殴った。ゆうこ姉さんの口が切れて口から血が飛び散った。ゆうこ姉さんは、意識を失いかけている。その時祐子の意識がはっきりして来た。祐子はその場に阿修羅の狂乱する地獄絵を見た。祐子は立ち上がった。両手を広げると秋田犬の前に立ちはだかった。

「やめて、殴るならわたくしを殴って！」

「どけ、俺はこいつに虫唾が走る。どけ！」

「いや、絶対にどかない。このままじゃ、この人死んじゃう」

「こいつは死んだ方がいいんだ。死んだ方がみんなのためになる。どけ！」

「いや、いや、絶対にどかない。この人、わたくしのこと、誤解しているだけなの。根はきっといい人よ。お願い、許してやって。ぶつならわ

たくしをぶって」

祐子は泣きながら、秋田犬にすがり付いて嘆願した。

「おまえは馬鹿だ。こんな虫けらに虚仮にされて、おれは我慢ができない」

「もう止めて！お願いだから、もうやめて……えーん、えーん」  
祐子の大きな泣き声で、秋田犬は振り上げた拳を下ろした。そうして、祐子から一步引くと、周りを見回して言った。

「この雌ブタに加勢した奴は前に出ろ、生かしちゃおかねえ」  
ゆうこ姉さんの取り巻きたちは、じっと身動きをしないで下を向いている。

「ええっ！？生きていたきゃ、早く前に出る」  
祐子は涙を拭いながら、言っていることが矛盾していると思った。前に出たら殺される、出ないで嘘をついたら殺される。どっちにしても殺されるんだ。と考えると急に可笑しくなった。祐子は急に笑い出した。

「わっはっは……わっはっはっはっはっはっは……わっはっはっはっはっはっは……」

また、皆、度肝を抜かれた気がした。山猫は失禁していて、泣いていたが、祐子の笑い声に涙が止まり、一瞬呆気にとられた。秋田犬が怒鳴った。

「なにがおかしい！」

「だって、ゆうこ姉さんの仲間の人たち、前に名乗り出たら殺される。名乗り出ないと殺される。どっちにしても生きる道が無いじゃないの。わたしの人生みたいで、急に面白くなったのよ」

「わっはっは……わっはっはっはっはっはっは」

「おまえ、狂ったのか？」

「狂ってなんか無いわよ。面白いものは面白いのよ」

「おまえがSの理由が分るような気がする」

「Sって何なの？」

「まだ知らない方がいい」

そう言うと秋田犬は元の位置に戻って、何事も無かったようにゆっくり座った。祐子はゆうこ姉さんの所に行き、自分のポケットからハンカチを取り出すと彼女の口元を拭いた。ゆうこ姉さんは意識が戻っているようだった。目に涙を貯めていた。

「大丈夫、苦しいところはない？」

祐子がそうと言うと、祐子の胸に泣き崩れた。

「ごめんよ。俺が悪かった」

「いいえ、わたくしが悪いのよ。誤解を生むようなことをしたから。ごめんなさいね。わたし、自分の人生が可笑しくて、可笑しくて、悲しくて、悲しくて……」

そう言うと、祐子は大きな声で泣き出した。

「えーん、えーん、えーん、えーん、えーん……」

自分の胸に頭を埋めているゆうこ姉さんの背中に手を廻して抱き締め、思い切り泣いた。その時、階段の上の天井の扉が開いて、男が顔を出した。

「五月蠅いぞ！消灯だ、明かりを消すぞ！」

それと同時に明かりが消えた。部屋の中は漆黒の闇になった。ゆうこ姉さんは静かに祐子の胸から離れた。祐子は自分の場所に戻って、壁に寄り掛かり、身体をまるめて、胸から脚に掛けて毛布で覆った。頭が痛む。口の中全体がしびれているようだ。頬の腫れている感じが分る。さっきまでは気付かなかったが、部屋の中はかなり冷えてきていた。祐子は賢に聞いたことのある呼吸法で、身体を温めることにした。数を数えながら呼吸を4吸い、4止めて、8吐いた。此れを5分ほど続けると体が温かくなって来た。「ご飯が体の中で燃えている」と祐子は思った。右の頬の痛みが増してきた。頭はてっぺんと後頭部がズキズキする。口の中が切れているようで、唾液が沁みた。祐子は白隠禅師の南素の法を行った。頭頂の痛みは去った。しかし、後頭部と頬の痛みは残った。祐子は瞑想をすることにした。ひとり、またひとりと風呂やトイレに立っているようだった。瞑目して暫らくすると、誰かが自分の横に来て、蚊の羽

音のような声で「飴よ」と言って祐子の手には四角い小さな塊りを握らせた。誰かは分らなかったが、祐子は小さな声で、「ありがとう」と言った。口に入れると飴は美味しかった。この世のものとも思われぬほど美味しかった。祐子の目から涙が流れ落ちた。喜びの涙だった。祐子はこの日1日の出来事を逆に辿ってみた。賢がいつもやっている省察だ。この日、自分が如何に賢に守られていたかしみじみ分った。いたるところに賢の手を感じた。

愛子は東京に来て初めて賢の居ない朝を迎えた。しかし、朝食はいつもの通り二人分作った。原が来るのである。昨夜原と約束をした。賢が留守にしている間、毎朝原がこのマンションに寄って二人で朝食をし、一緒に出かけることにしたのである。夕方、原が愛子の部屋の窓に明かりが灯ったのを見て、愛子が帰ったことを確認してから、マンションに来て一緒に夕食を摂り、8時になったらアパートに帰ることにした。原は愛子にごくみについて説明してから、愛子と話をするのが楽しみになった。愛子はまだ、原の話には附いて来られなかったが、原は愛子の理解力に一目置いていた。愛子が時々する質問の中に、想定外のことがあるので、それについて考えるのが面白かった。昨夜は愛子に頼まれて、語録の2番目「人間は人間を創る動物だ」という言葉について説明した。原には愛子に会うもうひとつの楽しみがあった。愛子が踊るバレエの練習を観て、そのステップの周期を計算したり、次の動きを予想することだ。祐子の心配と、賢の居ない不安から、愛子は知らず知らずの内に原が来るのを待つようになっていた。愛子が夕食の準備を始めたとき、呼び出し音が鳴った。興信所の者だと言った。賢からの依頼で調査したが、結果が出たので報告に来たと言った。愛子は、その場で待機してもらい、原に電話を掛けた。原は直ぐに来ると言った。原がゲートまで来ると愛子はロックを解いた。原に続いて、興信所の男性が入って来た。その後ろにカジュアルな服装の若い男性がいる。愛子はハッとした。自分を追っていた男を思い出して、体中に緊張が走った。しかし、平静を装って、

3人を部屋に通しソファーに案内してから、直ぐに茶を入れて来て客に出した。

「ご依頼いただいた内容の全容が判明しましたので、とりあえず報告に伺いました。正式には後日レポートさせていただきます。しかし、御依頼主の内観さんが、暫定の報告をご希望でしたので、本日伺いました」原が応えた。

「わたくしが内観の代理ですので、報告を伺います」  
愛子も頷いた。

「実はここにいる水口君が、こちらのお嬢様を追跡した犯人です。どうやら、お嬢様と友達になりたかったようです」

原が言った。

「なんだ、そうだったんですか？それなら、そうと、学校で愛子さんに言えばよかったじゃないですか」

「ぼ、ぼくは、それができなくて……つい後を追跡（つけ）て来て、家でなら言えると思ったんです。ぼくもこのマンションに両親と住んでいます。ですから、ときどき内観さんを見掛けると、後を追って声を掛けようとしたんですが、なにしろ足が速くて……」

原の提案で、水口が毎週火曜日の夕方、原の居るときにこの部屋を訪問し、少し会話することに決めた。水口は大喜びだった。話が決まると、興信所の男は引き取って行った。水口はそれから30分ほど話をして帰って行った。水口が引き上げると、愛子と原は顔を見合わせて笑い出した。これで、愛子の恐怖心は総て拭い去れた。愛子は直ぐに夕食の支度を始めた。カレーライスを作りながら、原に語録の2番目について説明して欲しいと頼んだ。原は喜んで話し始めた。

「この2番目の言葉はね、僕が施設の卒業記念の言葉に書いたものなんだ。中等を卒業するとき、皆、一言ずつ何か言葉を残すことになっているんだけど、僕はその時、どういう訳か分らないけど、自分が造られてゆくって感じていたんだ。その、つくるといふ部分は、どちらかと言うと施設の中で、自分の個性の周りに何か形が出来上がってゆくといった



イメージだったんだ。初等の頃は自分の思う通りに生きていたように感じていたんだけど、中等になると色々なルールがあって、それに施設で教えてくれる勉強も、自分の感じていたものとは別で、その教えてもらったように、感じたり、考えなければならなくなってくような気がしたんだ。それでね、よく考えてみたら、この社会は、人間が作ったものを基にして基準が出来ていて、その上に自分たちの個性も形作られているって感じたんだ。よくね、小さい頃、僕の仲間が桜島を見て、「あの山が一番大きい山だ」って言っていたんだ。ぼくもそう思っていた。そうしたら、施設の教科書には、日本にはいっぱい山があって、あの櫻島の御岳はちいさい、ちいさい山だと書いてあった。「小さいけどよく噴火するので、みんなが恐れている」って。その友達も、ぼくも櫻島は大好きで、一番大きな山だと思っていたから、この教科書は「なんか別の世界のことを書いてある」って感じたんだ。それがこの言葉を初めて書いたときの気持ちだったんだけど、いろいろ勉強してゆくと、段々自分が社会に形造られてゆくと感じたのは、実は逆で、本当は自分が社会、というより、世界を造っているって感じ始めたんだ。そして、その自分が造った世界が、自分を造り替えてゆく。つまり、自分が自分を創る、それが人間だと思えるようになったわけなんだ。そして、もっといろいろ分かってくると、実は自分の外側に見える世界は自分の内側が映し出された世界だと理解したんだ。だってそうだろう、目で見えている世界は、脳が光の小さな情報を演算して、形を構成して、それを認識しているだろう。実際はこんな風に目で見えているものなんて何も無いのに、全部脳が作り出している。この世界は自分が作り出している世界だと分かったんだ。「人間って何と素晴らしい動物なんだろう。自分を創る仕組みが組み込まれた動物なんだ」と感無量になって、「人間は人間を創る動物である」という結論に到達したわけなんだ。ところが、それがインスピレーションで書いた施設の卒業の言葉と一致したって訳なんだ。分かった？

「一寸、難しい。原さんの話は、何時も途中から難しくなる」

「じゃ、何か質問してみて」

「うん、この世界が自分の創った世界だとすると、どうして、自分を殺すようなことができるのかな？それに、自然だって、猛威を振るって人間を襲うことがあるじゃない」

愛子はカレーライスを盛った皿を2枚持ってテーブルに置きながら言った。

「僕はね、すべての人の意識はひとつに繋がっていると思っているんだ。だから、自分の感じていることは、基本的に君の感じていることでもあると思っている。総ての人の感じていることだと思うんだ。自然もそういう人の意識の反映で形作られ、変化していると思うんだ。時として起きる災害は、人々の意識の調和が乱れて起きた歪が原因していると思うんだ。まだ、はっきり数式化はできないけどね。愛子さんの質問は、僕がまだ検討中で、結論づけていない部分が多いように思う。愛子さんの意識も僕の意識に近いんじゃないかな」

「ふーん、そんなものかな」

愛子は野菜サラダを用意すると、原に食卓に着くように言った。二人で合掌してから、食事を楽しんだ。食事をしながら、原が祐子のことを話し始めた。

「あのね、祐子さんだけど、あの人は僕たちと違って、すごい人間愛を持っている人だと感じるんだ。愛子さんはそう感じない？」

愛子は、祐子が賢と抱き合っているところを思い出した。

「でも、特定の人のことをすごく強く愛し過ぎてるように思うけど」

「それができるってことが、その人間愛の強さを示していると思うんだ。普通の人は大抵、人を好きになったなんて言っても、「あなたを愛しています」とか、「愛してくれてありがとう」なんて言葉の表現を使って、自分を外側に置いて相手を見ていることが多いんだけど。祐子さんの場合は、自分がその愛の中に入り込んでいるって感じる。今迄は内観さんだけにしか向いていなかった愛だけど、そのうち、総ての人に向かう愛に変化して、それから、自分を捨てた愛に変わってゆくような気がする

んだ。もう愛と言うより、慈悲のレベルじゃないかと思うんだ」

「ふうん、そんなものかな。でも、祐子さん、どこにいるのかな」

賢は愛子に対し、祐子が誘拐されて危険な状態に陥っていることは話していなかった。愛子も原も祐子の失踪を、自分たちの失踪と重ねて考えていた。

「ぼくは、内観さんも祐子さんのことを、ものすごく強く愛していると思うんです。あの人も、誰でも目の前の人を好きになってしまう人でしょう。その中でも特に祐子さんに対しては、もし、窮地に陥っていたら多分自分の命を捨てても救い出したいという気持ちがあると思います」

「賢パパは、わたしの母に対してもそうでした。どうして、いろいろな人に対して、そんなに強い愛を抱くことができるのでしょうか」

「魂の奥に、深い愛の核があるのだと思います。だから、外側にそれが出て来るのだと思いますよ」

「ふうん、そうなんだ。わたしも賢パパがいるだけで嬉しくなっちゃやし、安心。でもね、原さんが居てくれるときもとっても安心」

「そんな、無理しなくていいですよ」

「ううん、本当にそう思うよ」

原は8時過ぎに帰って行った。愛子はテレビを点けっぱなしにして、宿題を済ませ、シャワーを浴びてから麻子に祈りを捧げ、床に着いたのだった。

賢はバスの中で、祈り続けた。祐子を守っていてくれることを、総ての存在に感謝した。途中から、祐子が自分の直ぐ横に居るような感覚に捕らわれ始めた。賢は、祐子の身に何か起こっていると感じた。今は、自分の下に来ている祐子の意識を抱き締めているしかなかった。意識の離れた祐子の肉体が心配だった。1時間ほど走ると、携帯のバイブレーションを感じた。愛子からのメールだった。

「賢パパ、祐子さんは見つかった？とても心配です。夕方、興信所の方

が来てくれました。水口という隣のクラスの男の子を連れて来ました。わたしを追跡（つけ）ていたのはその子でした。体の大きい人です。原さんが水口君と話をしました。わたしと友達になりたかったようです。原さんが、週に1日、火曜日の午後6時にわたしの家に、水口君も呼んで、一緒に話をすることを約束しました。水口君は喜んでいました。もう安心です。賢パパ、ありがとう。もう、わたしは大丈夫です。祐子さんのことを早く、見つけてください」

もう一通メールが来ていた。それはもっと前に届いていたものだったが、賢は着信に気付かなかった。田辺からだった。

「携帯が見つかったそうです。やはり、あの場所です。電池が抜かれ、通信記録やデータは全部消去されていました。また、連絡します」

賢は数馬に自分が今、佐世保に向かっていることをメールで伝えた。数馬から。直ぐに返信が来た。「直ぐにそっちに向かう」と言っていた。

賢は、数馬が今プロジェクトと結婚のことで多忙を極め、身動きできないことを知っていた。直ぐに返事を送った。「東京に居て、関係者の対応に当って欲しい、自分が必ず祐子を見つけてみせる」と伝えた。数馬からは了解したという返事が来た。それから暫らくして亜希子から電話が掛かって来た。賢は、バスの中なので、小さい声で、「メールを送って」と言って電話を切った。亜希子から少ししてメールが届いた。

「あなた、先ほど透視を試してみました。でも、どうしても祐子お姉さまのことが見えませんでした。暫らく集中していると、祐子お姉さまでなくてあなたが見えて来ました。もしかして、祐子お姉さまが見つかったのでは？と思って、あなたがバスの中に居ることを思い出し、不思議に思っています。祐子お姉さまに何かあったのでしょうか？」

賢は直ぐに返信した。

「透視は気を付けなくては駄目だよ。亜希子はテレポがあるから。下手に犯人の所にでもテレポしたら大変だからね。俺が近くに居るときだけにしたほうがいいよ。祐子を追っても、俺が見えるのは、祐子の意識が肉体から離れていて、俺のところに来ているからだと思うよ。多分、俺

に助けを求めているんだと思う。どうすることもできなくて、俺は苦しい。亜希子、祐子の安全を祈ってくれ」

「はい、わたくしはずっと祐子お姉さんの無事を祈り続けて居ます。明日は田辺さんと一緒に、支社に行ってみます。その後で、田辺さんとあなたを追って、そちらに参ります」

賢は自分が、ここ暫らくの間、祐子に対して労わる心が足りなかったことを思った。八重洲口で祐子の涙を見たとき、それに自分も同じように反応したとき、どうしてこれから起きる異常な状況を感知できなかったのだろうと思った。プロジェクトに傾注し始めてから、視野が狭まり、自分の周りの世界で起きている事象にしか意識が向いていなかったことに気付いた。祐子が自分の身に降り掛かりつつある状況を事前に察知していたのに対し、自分がそれを感知できず、如何に意識的に生きていなかったかと自省した。

バスから降りると、賢は直ぐに長崎県警佐世保署に出向いた。佐世保署には入り口に大きな立て板が置かれていて、そこに婦女誘拐事件緊急捜査中と書かれている。夜間なのに大勢の警官たちが警察署に出入りしていて、異常な雰囲気を感じた。祐子の事件がこれほどまでに大きく取り上げられているのを不思議に思った。警察署の中に入ると、祐子だけでなく、各地で何人かの女性が誘拐されたという事実があることが分った。賢がバスに乗る少し前に、緊急体制が敷かれたとのことだった。犯人が女性たちをどこに幽閉しているのかを捜査しているらしいということが分った。中でも祐子の足跡が、一番痕跡を追い易いようだ。賢が祐子を追っていることを知ると、直ぐに3人の警察官が賢を会議室に通した。そこにもライティングボードが置かれていて、失踪した女性の名前と失踪場所が記載されていた。全部で13名の名前が書かれている。42、3歳と思われる、髭の濃い警察官が言った。

「これは、人身売買を狙った組織的犯行のようです。何処か外国国籍の船に被害者を幽閉しているのだと思います。日本の犯罪組織も絡んでいるようです。ここ数日、佐世保港に停泊した船を調査するつもりですが、

外国の船は治外法権に守られているので、確固たる証拠と、手続きを経ないと立ち入りできないのです。今、署は必死になって、その船の特定を急いでいます。それがはっきりしたのはつい2時間ほど前のことですが、ぐずぐずしていると、もう我々が手を出せなくなってしまいます。相手が小さい組織ならまだしも、国が絡むような組織だと、国際問題にもなりかねませんから、緊急に、しかも慎重にことを運ばなくてはなりません。現在可能性のある船は12隻でそのうち5隻は既に出航しています。まだ、目撃者も発見できていませんし証拠もありませんから、海上保安庁に応援を依頼することもできません。既に出港してしまった船については、せいぜいレーダーで船舶の位置を確認し続けて、次にどこの港に入るかを追跡するくらいの事しかできません。今のところ、捜索願いの出ているのはここに書いた13人ですが、これからどれだけ増えるか未知数です」

賢は悲しくなった。祐子のことも、それから、見も知らない多くの女性達のこと、今はただ無事を祈るしかなかった。

「僕は、藤代祐子さんを救い出たくて、ここまで来ました。彼女の持っていた携帯で、ここの位置を確認できました。彼女には、普通の人に無い、意識をコントロールできる力があります。他人（ひと）の意識に働きかけることの出来る力も持っています。彼女は一緒に誘拐された人たちを守ってくれると信じています」

「それは、力強い言葉です。しかし、事態は深刻です。ここに記載された人たちは皆、会社勤めをしていた女性です。ですから、直ぐに捜索願が出されました。これ以外に家出していた少女や、歓楽街で働いていた女性などのように、失踪しても誰も捜索願を出さない人たちもいると思われるのです。むしろそちらのほうが数が多いかもしれません。そういう女性達の中には、荒んだ生き方をしてきた人たちもいると思いますから、必ずしも、被害者が一丸となって身を守ろうとしているかどうか分かりません。いずれにしても、今、緊急体制で200人ほど捜査に投入しています。特に藤代祐子さんについては、彼女の携帯の発見された場所

と、嫌疑の掛かっている小山田の近辺に50人の署員を配備して捜索を進めています」

賢はその経過を知りたかった。

「何か新しい事実は分ったのでしょうか？」

「ええ、小山田の会社の株が昨日までに、およそ3/4売却されています。それも、数人の投資家が売りに出したようです。利ざやを求めた投資家が買い戻しているので、株価の暴落は無いようですが……。それと、小山田は事務所に姿を現していません。祐子さんは携帯以外に何か持っていないませんでしたか？」

「ビジネスバッグを持っていたと思います」

「先ほど、ハイパートレード社の入っているビルの、焼却待ちのゴミの中から黒いビジネスバッグが見つかりました。それが藤代祐子さんのものなのかどうか確認できますか？中には何も入っていませんでしたが……」

祐子は眠れなかった。あまり水も飲んでいないのに、トイレに行きたくなった。暗さにも慣れ、ドアの隙間から漏れ来るわずかな光でもそこに居る女達の存在が確認できた。立ち上がると、祐子は摺り足でドアに向かった。途中、ゆうこ姉さんの横を通り、秋田犬の横を掠めて通った。二人とも隣の女性と重なり合って眠っているようだった。祐子は、「やはりすわって寝るのは無理なのかな」と思った。

扉を引くと、幾分足元が明るくなって、部屋の外の廊下が見通せた。右側手前の扉がトイレのはずである。祐子はトイレの扉を開けた。中は薄暗い電球がひとつ天井から吊り下げられているだけで、西洋式の便器がひとつある。トイレットペーパーは備え付けられていなく、右隅に水道の蛇口があり、その横に小さな金属製の手桶が置いてある。壁は薄汚れていて、何か黒ずんだものを擦（なす）り付けた跡があちこちにある。天井から紐が一本降りているだけである。用を足した後に、水を流す紐だろうと祐子は思った。祐子は用を足した後どうすればいいのか分らな

かった。しかし、とりあえず、下着をずらし便器に腰掛けた。尻に何かヌルツとした感触が感じられた。濡れていたのだ。しかし、どうすることも出来なかった。用を足してから、仕方なく左手で尻のぬるっと感じた部分を拭い取って、手前の水道の蛇口を捻った。水は出ない。暫らく待ったが一滴の水も出てこない。右手で衣類を直し、天井から垂れている紐を引いた。汚物の通路の蓋が開いただけで水は出てこない。蓋は直ぐに閉まった。祐子はトイレを出た。左手の汚れが酷く気になる。祐子は厨房と言われる部屋をそっと開けて覗いてみた。トイレよりは少し明るかったが、それでもやっと部屋の中が確認できるほどだった。中には紙くずが散らかっている。祐子はその紙くずを一つ拾って、左手を拭いた。それを天井の明かりに翳してみた。それは血だった。その血は誰か特定の女ものではない。全員のものだと思った。祐子はここが地獄の2丁目であることを再び思い知った。そこで、祐子は自分がここにいるということは、「ここを天国に変えろ」ということだろうと思い、微笑んだ。

「今日は疲れている。明日からここを天国にしよう。やりがいがある」自分に気合いを入れた。厨房の中を歩いて周ると大きな釜とガスコンロが置いてあり、それしか使った形跡は無い。しかし、一応の設備は整っているようだった。隅には金属製の食器が沢山棚に並べて伏せてある。食器棚の隣がりネン室だ。そこから、かすかに女のうめき声が聞こえてきた。その声は男と女が行為の最中であることを感じさせた。さっき下膨れの女が言っていた情事だろうと思った。祐子はもう一度トイレに戻り、左手を拭った紙の汚れていない部分で、便器の便座をきれいに拭い去って、それを便器に捨ててから部屋に戻った。毛布を首まで掛けて壁に寄り掛かると、

「不垢不浄とは言っても、一寸汚すぎる。賢はこんな状況も知っていて、あんな説明をしたのだろうか。しかし、太古の人たちはこんな生活をしていたのかも知れない」

そんなことを考えていると何時しか眠りに落ちた。



翌朝、祐子は騒々しい物音と女たちの悲鳴のような声で目を覚ました。誰かが死んだと騒いでいる。明かりが点いているので、既に起床の時間を過ぎていたようだった。

「ねえ、誰か来て！誰か！この人、息してない！」

「あ、死んでる！ああ、どうしよう。もう冷たい」

「どうしよう、誰か、あいつらを呼んで！」

周りの女たちは押し重なるようにして離れて、その女の周りには50センチほどの空間が出来た。

祐子は人を掻き分けて、死んでいる女のところに駆け付けた。

「ねえ、あなた、しっかりして！しっかりして！死んじゃ駄目！ねえ、起きて！ねえおきてよー」

微かに息をしているのが分る。祐子は女の額に手を当てた。氷のように冷たい。祐子は冷たくなっている女の手をとって自分のブラウスの中に差し込んだ。冷たくて体が震えた。祐子はいきなりその女の上着の前を空けた。ボタンだったので難なく開けられた。祐子は自分のブラウスをぬいで、キャミソールだけになって、その女を仰向けに寝かせ、自分がその女の上に覆いかぶさって、その女を強く抱き締めた。祐子は頬をその女の頬につけた。冷たさがどンドン体の中に入ってくる。祐子は呼吸法で自分の体を温めることを始めた。体はどンドン冷えてくる。その時誰かが自分の毛布を祐子の背中に掛けた。まだぬくもりがある。するとまた、もうひとりの女がその上に毛布を掛けた。毛布は次第に重なり合っている二人の女の周りに山のように掛けられた。祐子はその女の頬を擦った。祐子が言った。

「誰か、お湯を沸かしてください。呑めるお湯を」

二人の女がドアの外に駆け出して行った。

「しっかりするのよ！生きなきゃ駄目よ！生きることが大切なのよ！」

祐子は女に言いながら、顔や手を摩った。必死に摩った。10分ほどすると、女は目をうっすらと開けた。そしてまた閉じてしまった。

「ねえ、頑張りなさい。生きるのよ！わたしがあなたを幸せにしてあげ

る。ねえ、生きなさい！生きようとしなさい！頑張りなさい！」  
先ほど飛び出して行った二人の女性がやかんとコップを持って来た。昨日のラッコと胡瓜だった。祐子はその湯を自分の口に含んだ。口の中の傷口が火のように沁みた。祐子はその痛みを横においた。湯が冷めるまで口の中を転がして、ゆっくり女の口に口づけをした。女は歯を食いしばっている。祐子は自分の舌を女の歯の間に無理やり押し込んだ。やっと女は口を開いた。祐子はぬるくなった湯を、少し注ぎ込んだ。女は暫らくの間、口の中に水を入れたまま動かなかったが、やがてゴクンと音を立てて湯を飲み込んだ。祐子はまた少し口の中の湯を注ぎこんだ。女は、今度は直ぐに飲み込んだ。祐子の口の中の湯が総て女の口の中に注がれると、女の中から涙が流れた。まだ体は冷たいが、心なしか唇に赤味が戻ってきた。女ががたがたと震えだした。祐子は「やった」と思った。女の体がやっと生气を取り戻しつつあるのが分った。祐子はまたラッコがコップに注いでくれた湯を口に含むと、女の口に注ぎ込んだ。女はどんどん飲んだ。祐子は両手で女の顔をマッサージした。白っぽくなっていた顔が紫色になって来た。祐子は体を起こした。山のように積み上げてある毛布を掻き分けながら祐子は、賢と一緒に入った砂湯を思い出した。そして、「ふふっ」と微笑んだ。

「ねえ、手伝って、・・・この人の体を擦るのよ。暖くなるまで」  
周りに集まってきていた女たちに声を掛けた。祐子はその女の胸の上を摩ると10人ほどの女が一斉に集まってきて、毛布を掻き分けるとてんでに手や足、腹や顔などを擦り始めた。女は漸く血の気が戻ってきた。その時天井の扉が開いて、男が降りて来た。男は途中まで降りて来ると、大きな声で怒鳴った。

「どうした、何があったんだ？」

ひとりの女が応えた。

「この人が死にそうだったのよ」

男は慌てて、階段を下りて来た。

「大丈夫か？」

体を摩っていた女たちが少し死にそうだった女から離れた。祐子はまだその女の胸を摩っていた。

「おいお前、何してる。どけ！」

祐子は、男の方を向いて言った。

「親分に合わせてください。これじゃ、どこだか知らないけど、着く前に皆死んじゃう」

「けっ、馬鹿なこと言うんじゃねえ。これまで、このやり方でやってきたんだ。てめえにとやかく言われたくねえ。すっこんでろ！」

「もしも、この人が死んでたら、どうするつもりだったのよ！」

「ばかが、体の弱ええやつは早くくたばった方がいいんだ。おやぶんだってそう言ったら」

その時、上のほうから別の男の怒鳴る声をした。

「誰だ、俺を呼ぶ奴は、やすか？」

「いえ、親分、女が死にそうだったんで、様子を見てたんです」

「やす、女を殺すなよ。てえせつな商品だからな」

祐子はできる限りの大声を出して怒鳴った。

「親分さん、話があります、少し降りて来ててください！」

「馬鹿やろう、親分は忙しいんだ！余計なことを言いやがって！」

しかし、親分は階段を下りて来た。その後ろにもうひとりの男が附いて来る。その男は手に1メートルほどの鞭を持っている。下まで降りると親分が言った。

「元気のいいアマだな・・・こいつかSというの？」

「はい、そのようです。こいつが親分を・・・」

「いい度胸だな。何が言いたい？」

祐子は死に掛けた女から離れた。女はそのまま仰向けに寝ている。

「親分さん、このひとはさっき死に掛けたんです。親分さん、わたしらをどこかに売るんでしょう。これじゃみんな死んじゃって、売り物が無くなっちゃいますよ」

「ばか、体の弱い奴をここでふるいに掛けてるのが分らねえのか？」

女たちが怯えているように祐子には感じられた。祐子は言った。

「親分さん、商売は、いきのいい、新鮮な商品売れば高く売れるでしょう。今のやり方じゃ、皆ぼろきれのようになって、高い値段がつきませんよ。わたしらだって、こんな酷い扱いを受けちゃ、生きていたくなくなっちゃいますよ。親分さんは、立派な方だから分るでしょう。わたしらを元気にさせるのが一番いい金になるんですよ。みんなが生き生きしていれば、値段を引き上げられるってもんですよ」

親分は少し考え込んでいるようだったがやがて、祐子に向かって言った。

「どうすればいきいきする？言ってみろ！」

祐子は「しめた」と思ったが、顔に出さずに言った。

「まず、部屋を明るくしなくちゃ、気が滅入っちゃいますよ」

そう言いながら、祐子は死にそうだった女を抱き起こし、ラッコから湯の入ったコップを受け取って、自分が少し口に含んで確かめ、その湯をふーとふいてから、死にそうだった女の唇のところに持って行って、少し飲ませた。

「便所も、厨房ももっと明るくなくちゃ、女は生きようって気がなくなるんですよ・・・それから、便所に紙と水がいつもあるようにしてくれなくちゃ、自分が人間じゃなくなったような気がしてきちゃいますよ。手も洗えないじゃないですか」

「おい、きさまら、ちゃんとしてなかったのか？」

「へい、少しでも紙や、水を使わないようにさせようと……」

「ばかか、おめえは、それでも人間か?! いくら売り払うからって、こいつらだって同じ人間なんだ。ちゃんとしてやれ！」

「へい、すみませんでした。これからはきちんと用意しやす」

そう言うとやすは、そわそわし始めた。

「姉さん、それだけで、生き生きするのか？」

「いいえ、わたしらは体が汚れるくらいなら、死んだ方がいいと思うんです。女はみんなきれいになりたいのよ。風呂に入れないんなら、せめてお湯で体を拭くくらい許して欲しいの。1週間に1回、それも洗面器

半分の水じゃ、体も拭けないし、タオルだって、10人に1枚じゃ、体を拭いたって汚れが落ちた気がなくて、汚くて・・・嫌になっちゃう」

「だれがこんな扱いをしろって言った?!」

やすは明らかに、おどおどしている。

「馬鹿やろう！」

そう言うと、親分はやすの方を振り返り、いきなり右頬を平手で殴った。

やすは女たちの間にのめり込んで倒れた。

「やす、おめえ、くすねたな？ちゃんと人数分用意しろと言っただろうが・・・姉さん、すまねえ、われらは金さえ儲かればいいんで、姉さんたちをいじめようなどと、毛頭思っちゃいないんですよ。ここは一寸狭いけど、それさえ我慢してもらえりゃ、いずれ、いい思いができればいいんですけど」

「それなら、食事もちょうと食べさせてよ」

「やす、きさま、飯もくれてねえのか？きさま、何処まで馬鹿だ、間抜けが！」

「親分、飯はちゃんと与えています。当番を決めて・・・」

祐子はありのままを話そうと思った。

「ご飯は、金属のおわん1杯で、たくあん2切れ、あとは水1杯。これじゃ、いずれ栄養失調ですよ。まるでブタ並みの扱いですよ。近頃はブタだって、もっとましな物を食べてますよ」

親分はやすを睨み付けて言った。

「おめえって奴は・・・一人当たり1食いくらにしてあるんだ」

「へい、親分、1食100円です」

「100円で飯1杯か？・・・はっきり言ってみろ」

親分はやすに向かって怒鳴った。

「いいえ、まだ買えやす。野菜とか、肉も少しくらいなら・・・」

「どうして、そうしない」

やすは返答に窮して黙ってしまった。親分の左横から秋田犬がぼつっと言った。

「やりてえんだよ。こいつら」

「なんだと？」

親分はキツとなった。

「やす、きさま、商品に手を出してなんかいねだろうな？」

秋田犬は追い討ちを掛けるように言った。

「こいつら、女を抱きたいから、くすねてるんだ。丘上がったとき余った金で、菓子や下着なんかを買うんじゃないかねえのか。ここの女はやらせりゃ、菓子やタオルをもらえるんだ。だから、こんなひでえ扱いをして、おれっちを飢えさせてるんだ」

親分は秋田犬に向かって怒鳴った。

「このあま、いい加減なことぬかすな。おめえの言うことが本当なら、やすは生きちゃいられねえ。そうだろう、なあ、やす?!」

やすの顔色が青くなっている。やすはただ頷いただけだった。おやぶんは後から附いて来た男に向かって言った。

「おい次郎、おめえまさか、商品に傷をつけたりしてねえだろうな?!」  
次郎はたじろいた。そして、いきなりその場に土下座した。

「おやぶん、ゆるしてくだせえ。おれ、我慢ができなくて」

「おう、そうかそうか、そうかよー・・・」

そう言いながら親分は次郎の方に振り向きざま、いきなり次郎の頭を拳固で殴った。次郎はやすの上に折り重なるように倒れた。

「おやぶん、許して下さい。もう二度としやせん！」

「2度とされてたまるか、忘れねえ様にしねえとな、まあ、おめえが居なくなっちゃ、仕事も回らねえから、命だけは助けてやる。だけどなあ、約束の印を貰わねえとな。印だよ、印」

「おやぶん、勘弁して下さい。許してください！」

「許して下さい。こいつら、生娘じゃねえもんで。つい」

次郎とやすは涙を流しながら、頭を床にこすり付けて謝った。

「次郎、おめえが責任者だったな。もう二度としねえ約束の印に、指一本預かるぜ。ええっ!？」

「親分、それだけは勘弁して下せえ」

部屋全体に緊張感が漲った。女たちは怯えている。

「おいやす、出刃包丁と俎板を持って来い！それから、包帯と軟膏も忘れるな。預かった指を入れる入れ物もな。おお、そうだ、ついでに針箱も持って来い！おめえたちも無罪じゃねえからな」

次郎は失禁して、ズボンの裾から小便が流れ出している。やすはがたがた震えながら、階段を登り始めた。

「やす、やった奴を全員ここに呼べ」

「へ、へい、・・・お、おやぶん」

やすは階段の途中で止まって返事をする、慌てて階段を駆け上って行った。

「さて、やすが来るまでの間に、姉さんとの話を詰めようか。なあ姉さん、あんた、どうすりゃここの女が、皆高く売れると思うかね？」

祐子は応えた。

「親分さん、親分さんが一番よくご存知でしょう。女は大切にされて、可愛がられりゃ、それは、美しくなるんですよ。どんな男だって、そういう女を欲しがりますよ。だから、女が可愛くなるようにすればいいんですよ」

「姉さん、あんたなら、如何（どう）されたら、きれいになる？・・・ああ、いや、姉さんはそのままでも十分にきれいだがね」

「親分さんのような強い男が、毎日見回ってくれて、あいつ等からわたしらを守ってくれて、わたしらには、普通の食事を与えてくれて、普通の風呂に入れてもらって、普通の化粧がさせてもらえて、きれいな便所で用足しさしてもらえりゃ、もうそれで、十分きれいになりますよ」

「そりゃ、無理だな。大体、あんたらには精精ひとり5千くらいしか掛けられねえ。それで、できるわけねえだろうが」

「親分さん、わたしらが倍で売れりゃ、1万は掛けられるんじゃないの？」

「誰がそんな保障をする？売れなきゃ、もともこもありやしねえ」

「わたしが約束するよ。絶対倍で売れるようにしてみせるよ」  
「駄目だったらどうする。姉さんの指くらいじゃすまねえぜ」  
「分かってるよ。だめなら、わたしをすき焼きにして喰いな」  
「いい度胸してるじゃねえか。ようし、おれは長ネギと糸こんと焼き豆腐を用意しておくか」

祐子は可笑しくなった。自分がすき焼きになっているところを想像した。「きっと美味しいにきまっている」と思った。だけど、足の先なんかは汚いし、誰が食べるのかな？などと考え、なぜ、そんなことを言ってしまったのかと思った。自分はこんなすごいことを言う女になったのかと思ひ、可笑しく、悲しくなってきた。

「わっはっはっはっは・・・わっはっはっはっはっは・・・」  
声は笑ったが、胸の中には涙が一杯溢れていた。  
緊張している雰囲気の中で、また女たちは度肝を抜かれたように驚いた。親分が言った。

「姉さん、何が可笑しい。気でも狂ったのか、ええっ!？」  
「わたしのすき焼きのことを考えたら、どこが一番おいしいかなあなんて考えて、誰が脚の指を食べるのかな？なんて思って可笑しくなっちゃったんですよ」

親分はぞっとした。なんという女だと思った。そこにやすが3人の男を連れて、階段を降りて来た。

そこで行われた残酷なショーの間、女たちは両手で目を隠していた。祐子は両目を瞑って下を向いた。次郎は左手の小指を切り落とされた。それをやすがやった。やすは、「あにき、許して下せえ!」と言ってから、「えい!」と気合を込めて、切り落とした。次郎はがたがた震えていたが、切り落とされる時、「ぎゃーっ!」と悲鳴を上げて、その場で気絶してしまった。男たちが、直ぐに傷口に軟膏を塗って、切り口を思い切り包帯で縛り上げた。手際がよかったので、酷い出血は無かった。その後は、やすを入れて4人の男たちに対して、中指の指と爪の間にマチ針を刺す拷問が行われた。4人とも悲鳴を上げたが、気絶はしなかった。



一連の仕置きが済むと、親分が言った。

「おめえたち、もう、2度と変な気を起こすんじゃねえぞ！」

マチ針の拷問に耐え抜いた4人の男たちは一斉に

「へい、もう二度としません」

と言った。

「さあて、我々の仲間の内、やったやつは全員、罰を受けた。だが、その相手をした女がいるはずだな。ええっ!? さて、前に出てもらおうかな！」

ゆうこ姉さんとその10人の取り巻きはかたまってがたがた震えている。ゆうこ姉さんも顔面蒼白で唇をかみ締めた。泣き出している女もいた。

「誰もいねえのか?・・・じゃ、この生きのいい姉御に代表になってもらおうか？」

親分は秋田犬の方を向いて言った。秋田犬が

「俺はそんなこたあしねえよ。俺みてえな女を抱きてえ男が居るもんかね。それは・・・」

そういう掛けた時、祐子が間に入って言った。

「わたしです。わたしが責任を取ります」

と言った。親分は

「姉さん、姉さんは昨日入ったばかりじゃやねえか。それにSだし、そんなわけにやいかねえ」

「いいえ、今度のことは、わたしが言い出したことだから、わたしがひとりで責任を負います。わたしを如何（どう）とでもしてください」

親分がにやっと笑った。

「結構じゃねえか。あんたみたいな別嬪さんを拷問するのも、滅多にねえことだ。よかろう。他の全員の分の拷問を受けようって訳だな？」

「ええ、思う存分、やってください」

祐子は、自分が何故、此れほどまでに、恐れを知らずにいられるのか不思議だった。そして、その馬鹿らしさに可笑しさが込み上げてきた。



で祐子の左手を握った。それから中指を引き出して、きつく握ると右手の親指と人差し指でマチ針を掴み、左手の中指の近くに近付けて、祐子の顔を見た。祐子は口をきつと閉じ、目を瞑った。親分は、ゆっくりマチ針を爪と指の間に挿入して行った。祐子は悲鳴は上げなかったが、ズキッと痛みが走り、それから気を失った。祐子が気を失うと、親分は直ぐにマチ針を抜いて言った。

「まったく、マチ針一本で気を失う癖に、大した度胸だ。おい、やす、直ぐにタオルに水を浸して来い。一番上等なタオルを使えよ。見てみろ、おめえらよりよっぽど立派じゃねえか。見てみろ、このきれいな顔を！こんなきれいな女は見たこともねえ・・・おいやす、今日の昼から、この女達にはおめえらと同じ食事をさせるようにしろ。いいな、トイレもきちんと掃除しろ、それから、もう、2度と商品に手をつけるなよ。おれが、毎朝、毎晩見に来るからな！」

やすはその場にひれ伏した。

「親分、分りやした。申し訳ありませんでした！」

やすがひれ伏したのを見て3人の男たちも所狭しと体を重ねるようにしてひれ伏した。やすは立ち上がると直ぐに階段を登って出て行った。女たちは、一斉に泣き出した。安堵と祐子への恋慕の涙だった。親分は片膝ついて、気絶している祐子の上半身を膝の上に抱きかかえていた。やすが水を含んだタオルを持って来ると、親分はそのタオルを取って、祐子の頬をそっと拭った。祐子は静かに目を開けた。親分の顔が直ぐ近くにあった。祐子はわずかに微笑んで。

「親分さん、ありがとう」

と言った。親分は祐子の顔を覗き込むようにして言った。

「姉さん、よく耐えたな。これからあんたの言ったようにするから、みんなに、きれいになってもらってくれよな」

「親分さん、ありがとう。ここもみんなが生きてゆける場所になりました」

そう言いながら、祐子は親分の膝の上から起き上がった。

「欲しいものがあつたら、俺に言いな」

親分はタオルを祐子に渡すと、「飯の支度をしろ！」と言って、4人の子分を連れて階段を登って行った。4人の子分たちは鉋や俎板など、拷問の道具を取りまとめて、あたふたと親分の後に従った。一瞬部屋の中がしんとなった。ゆうこ姉さんが祐子の所に来た。

「姉さん、わたくしを許してください。あんな無礼を働いて、なんとお詫びしていいか……」

ゆうこ姉さんの顔は涙でぐじゃぐじゃになっていた。祐子は言った。

「ゆうこ姉さん、わたくしも祐子って言うのよ。ゆうこ同士、仲良くしましょう。あなたでしよう、餡くれたの。美味しかったわ。これで体もきれいにできるわ。ああ、愉快ね……わっはっはっはっはっは……  
わっはっはっはっはっはっはっは……」